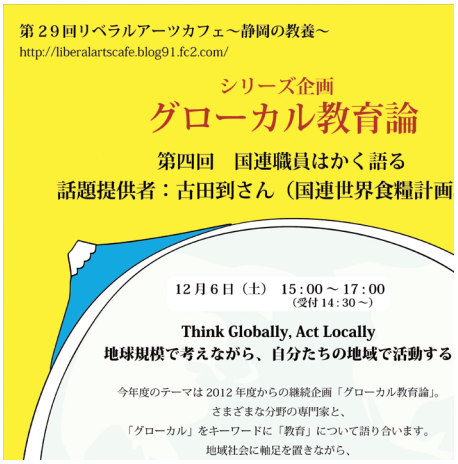


平成 26 年度
静岡大学地域連携応援プロジェクト
成果報告書

国立大学法人静岡大学
イノベーション社会連携推進機構
Organization for Innovation and Social Collaboration

目　　次

◆巻頭言　静岡大学地域連携応援プロジェクトについて ―― 2
阿部 耕也｜イノベーション社会連携推進機構 地域連携生涯学習部門長

平成 26 年度静岡大学地域連携応援プロジェクト 成果報告

1．児童養護施設における学習支援の取り組み ―― 3
〈代表者〉井出 智博｜教育学部 准教授

2．大学と保護者と親の会の連携による発達障害児への学習等支援活動「きんもくせい土曜教室」―― 6
〈代表者〉大塚　玲｜教育学部 教授

3．敷地でまなび、世界をつなぐ「しきじ土曜倶楽部」支援プロジェクト ―― 8
〈代表者〉河村 道彦｜教育学部 准教授

4．静岡県内の公共機関と協働する子どもたちのための造形プログラムの開発運営事業 ―― 11
〈代表者〉川原﨑 知洋｜教育学部 講師

5．地域の小・中学校と連携した日本伝統音楽普及のためのアウトリーチ活動 ―― 14
〈代表者〉北山 敦康｜教育学部 教授

6．焼津市の NPO 法人イーランチと連携した
「静岡版保護者向け情報モラルワークショップ」の開発・実践と普及 ―― 16
〈代表者〉塩田 真吾｜教育学部 講師

7．遊びや体験活動を通して学びに熱中する子ども育成の場「ちびっこ寺子屋プロジェクト」―― 18
〈代表者〉志民 一成｜教育学部 教授

8．地域をつくる社会教育事業への参加プロジェクト―シニアの教育力に学ぶ、学生の発想に学ぶ― ―21
〈代表者〉渋江 かさね｜教職大学院 准教授

9．「リベラルアーツカフェ～静岡の教養～」による「グローカル」をテーマとするカフェの実践 ―― 23
〈代表者〉藤井 基貴｜教育学部 准教授

10．さあ、違いを認め合える私たちのまちへ。～支援でつながる多文化共生の輪～ ―― 25
〈代表者〉矢崎 満夫｜教職大学院 准教授

11．旧湯ヶ島小学校を利用した天城山周辺における自然環境資源の有効活用 ―― 28
〈代表者〉徳岡　徹｜理学研究科 准教授

12．本が好きな子、集まれ！キッズチャレンジ 静大図書館 ―― 30
〈代表者〉松下 昭重｜学術情報部図書館情報課 主任

13．身近なもので Science ―― 33
〈代表者〉大橋 和義｜技術部教育支援部門 技術専門職員

巻　頭　言

静岡大学地域連携応援プロジェクトについて

阿部 耕也 ｜ イノベーション社会連携推進機構 地域連携生涯学習部門長

静岡大学は、『自由啓発・未来創成』のビジョンを掲げ、「質の高い教育と創造的な研究を推進し、社会と連携し、ともに歩む存在感のある大学」を目指して、教育・研究・社会連携の三つを大きな使命としています。なかでも社会連携に関しては、「地域社会とともに歩み、社会が直面する諸問題に真剣に取り組み、文化と科学の発信基地として、社会に貢献する」ことを使命としており、平成 24 年度に地域連携と産学連携に携わる組織を統合し、イノベーション社会連携推進機構を設置しました。

平成 26 年度プロジェクト募集のポスター

学内において、地域連携活動の窓口となる組織を設置する前から、すでに本学の学生・教職員はさまざまな地域連携活動に携わっていますが、それらの活動は必ずしも学内外の皆様には知られておらず、また活動に際していろいろな困難を抱えているのが実情です。そこで、平成 23 年度にイノベーション社会連携推進機構・地域連携生涯学習部門の前身である地域連携協働センターが、「地域連携応援プロジェクト」を企画し、「本学の学生・教職員が主体となり、地域の人々や団体、自治体等と協働で取り組んでいる又は新たに取り組もうとする地域活性化につながる活動」への支援を学内で公募、採択しました。初年度以降も継続して公募を行い、これまでの支援実績は下表のとおりです。

各プロジェクトチームは、学外の方々と連携しながら着実な活動を展開し、有益な成果が得られており、その成果は学内外に高い評価を受けております。ここに平成 26 年度の成果をまとめて「地域連携応援プロジェクト成果報告書」を発行いたします。

平成 25 年度からは新たな展開として、本プロジェクトを手がかりに、これまで大学との接点がない地域から広く課題を公募する「地域課題解決支援プロジェクト」を立ち上げました。最終的に提案された 27 課題についてヒアリングを行い、モデル事業として選定された 3 地域の課題群を中心に、学内外の支援を得た新たな地域連携・貢献活動を展開中です。

本成果報告書をご覧いただき、本学には学生・教職員の携わる多様な地域連携活動があることを知っていただき、今後それらの活動に加わったり、あるいは新たな地域連携活動を始めたりするきっかけとしていただければ有り難く存じます。

年度	応募	採択	学内他部局に付託（依頼先）	予算措置
H23	17 件	7 件	4 件（防災総合センター）	100 万円
H24	18 件	11 件	3 件（学生支援センター）	150 万円
H25	14 件	12 件	0 件	180 万円
H26	16 件	13 件	0 件	180 万円

地域連携応援プロジェクト 過去 4 年の応募・採択状況

1

児童養護施設における学習支援の取り組み

井出 智博 ｜ 教育学部准教授
山本 勘太朗・大津 孝仁 ｜ 教育学部 1 年
井上 暢・梅原 拓未 ｜ 教育学部 2 年
寺尾 綾香・伊藤 亜佑子 ｜ 大学院教育学研究科 1 年

はじめに

児童養護施設は「保護者のない児童，虐待されている児童など，環境上養護を要する児童を入所させて，これを養護し，あわせて退所した者に対する相談その他の自立のための援助を行うことを目的とする施設」（児童福祉法第 41 条）とされ，様々な理由によって家族と生活することができない子どもたちにとっての家庭に代わる生活の場です。近年，彼らの多くが過去に虐待を経験しており，情緒面，行動面で様々な困難を抱えていることが指摘されるようになってきました。また，彼らの多くは学習上の困難も抱えています。例えば，Vondra ら（1989）は虐待を受けた男の子は学習することや学校へ通うことへの動機づけが低下していることを指摘しています。また，Rowe ら（1999）は留年の率，読解力，計算力の領域で被虐待児が一般の子どもよりも劣っていたことを示しています。さらに，一般家庭の子どもたちの学習時間は学年が上がるにしたがって長くなっていくのに対して，施設で暮らす子どもたちは施設で定められた学習の時間にだけ取り組み，学年が上がっても学習に取り組む時間が長くならないという指摘もあります（澤入，2009）。

このように，施設で暮らす子どもたちは学習を巡る困難を抱えていますが，児童養護施設には学習をサポートする専門の職員が配置されている訳ではなく，むしろ，数少ない大人が日々，子どもたちの支援に奔走している現状があります。また，近年，児童養護施設や里親家庭など，家族と共に生活できない子どもたちに対する児童福祉制度の枠組みの中での養育のことを「社会的養護」と呼んでいます。「社会的養護」では福祉に携わる人だけが支援するものではなく，社会全体の問題として，地域や社会が彼らの養育に関わることを理念としています。そこで，本プロジェクトでは，地域で暮らしている社会的養護を要する子どもへの学習支援として，教員養成課程で教員になることを目指す学生が，施設で暮らす子どもたちの学習を支援することに取り組みました。

児童養護施設における学習支援

虐待を経験した子どもたちの多くは，他者との信頼関係を構築することに困難を抱えています。そのため，長尾（2010）は施設で暮らす被虐待児に対する学習支援では，①子どもに学習時間および学習支援者が安全であることを伝えていくこと，②子どもが脅かされず安心できる距離を保って関係作りをすること，③子どもの世界を積極的に共有していくこと，④子どもの気分や体力の状態を適切な状態に調節することが重要であるとし，特別な配慮を要するとしています。本プロジェクトでは，児童養護施設で暮らす子どもへの学習支援を，「他者を信頼する，自分を信頼するという力についての特別な配慮が必要な子どもに対する特別支援教育」と位置づけて，学習支援を行いました。

学習支援の実施体制

本プロジェクトでは施設で暮らす子どもや子どもの学習を取り巻く課題を鑑み，①教育の内容と方法に一定のスキルを持つ支援者が，②子どもが安心して学習に取り組むことができる関係を築きながら，③日常の生活から切り離された空間で，④定期的に，⑤個別に対象児童のモチベーションや能力に合わせて学習支援をおこなう。さらに，⑥支援者は定期的にスーパーバイズや研修を受けながら学習支援に取り組むことで，自らの実践の方向性を精査する，という 6 つの特徴を持った取り組みを進めることにしました。

学習支援は 6 月下旬から，毎週金曜日の 18 時～ 21 時の間に，施設の近くにある公民館の部屋を借りて行いました。学習支援者となったのは，教育学部で教員免許の取得を目指す学生と大学院生，合計 6 名でした。

また，学習支援を進めるにあたって，およそ月 1 回のペースで学習支援者の勉強会を開きました。この勉強会には施設の職員さんも参加され，施設で暮らす子ども，虐待を受けた子どもの心理的な特徴を学ぶと共に，自分が担当している子どもとの間で起きていることを学習支援者，施設職員で共有し，どのような支援を行うかについて検討し合いました。さらに，この勉

強会では，児童福祉施設と学校教育が連動して行われている教育実践を学ぶために，児童自立支援施設三方原学園に見学実習に伺いました。

活動の概要

本実践では，児童養護施設で暮らす子どもへの学習支援を，「他者を信頼する，自分を信頼するという力についての特別な配慮が必要な子どもに対する特別支援教育」と位置づけ，彼らの情緒的，行動的な特徴，あるいは生活，学習環境を考慮して，①教育の内容と方法に一定のスキルを持つ支援者が，②子どもが安心して学習に取り組むことができる関係を築きながら，③日常の生活から切り離された空間で，④定期的に，⑤個別に対象児童のモチベーションや能力に合わせて，学習支援をおこなう。さらに⑥支援者は定期的にスーパーバイズや研修を受けながら学習支援に取り組むことで，自らの実践の方向性を精査する，という学習支援を実践することとしました。

学習支援の風景

学習支援の対象になったのは，中学３年生１名，中学２年生３名，中学１年生２名の計６名です。まず学習支援者が取り組んだのは，学習支援を行う下地作りでした。子どもたちの中には，学習支援の時間に漢字の書き取りのような宿題を持参して，黙々と取り組む子どももいました。彼らの姿を見ていると，「できないところを見せたくない」ということを感じました。そこで，まず安心して学習支援者と過ごしてもらえるよう努めました。比較的社会科が好きなＡくんへの支援では，iPad を使って世界地図を見てみたり，サッカーが好きなＢくんへの支援ではワールドカップに出場する国のことを話したりすることで，一緒に学ぶという関係を作ることに取り組みました。また，関係が少しずつできてくると，その子どもが好きな歌の歌詞に含まれる英語を訳してみたり，夏休みの自由研究の実験を一緒にやってみたりすることに取り組みました。学習支援者としては子どもたちに学力が身に付いてきたかということはよくわかりませんでしたが，「一緒に勉強しよう」と思ってくれていたり，毎週の学習支援の時間を楽しみに待ってくれていると感じられるようになっていきました。

こうした学習支援と並行して，２ヶ月に１度くらいの頻度で，学習支援に参加する学生が集まり，勉強会を開いてきました。そこには教員と施設の職員さんにも参加してもらい，学習支援の現状について報告し合ったり，やってみたい支援の方法についてアイデアを共有したりしました。また，施設で暮らす子どもたちへの教育について学ぶために，静岡県立三方原学園とそこに併設されている浜松市立有玉小学校，積志中学校萩原分校に見学に伺いました。三方原学園は児童自立支援施設という児童福祉施設で，非行などの問題を抱えた子どもたちが入所して生活指導を受ける施設であり，浜松市立有玉小学校，積志中学校萩原分校はそこに入所した子どもたちが通う施設内にある学校です。こうした施設や併設された学校では，ルールが紙やテーブルに貼られていたりするなど，視覚刺激，聴覚刺激の両方から子どもたちに情報を届けようとする工夫が随所に行われていました。また，できないことではなく，子どもができたことに目を向け，認めてあげることは，そういう経験が少なかった施設で暮らす子どもたちに肯定的な態度で接する方法を学ぶ機会になりました。

三方原学園見学

効果と成果

子どもたちに対する学習支援にどのような効果があったかについて考えてみます。この実践の目的は，単に子どもたちの学業成績を向上させることにある訳ではなく，まず施設で暮らす子どもたちが「学ぶことを楽しい」と感じてくれるようになることが子どもた

ちの学習意欲の向上につながり，ゆくゆくは学業成績の向上につながるのではないかと考えました。そこで，まず，子どもたちが学習の時間をどのように感じてくれていたのかについて尋ねてみることにしました。その結果を図１に示します。このアンケートは「まったくあてはまらない」から「とてもあてはまる」の５件法です。まず，子どもたちは「大学生と話すのが楽しかった」と答えてくれています。「勉強に関して自信がついた」「勉強が分かった」ということに関しては「どちらでもない」に該当する３点に近い数値になっていますが，「施設で勉強するより集中できた」「もっとやりたいと思った」というように，学習に取り組もうとする気持ちには子どもたち自身が変化を感じてくれているようです。

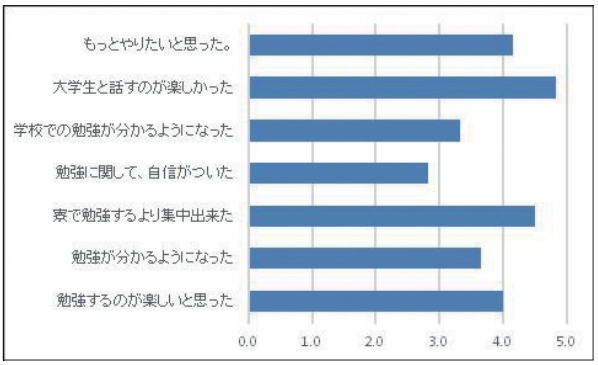


図１　学習支援の感想

また，学習支援を行う前と後にコンピテンス尺度を子どもたちに答えてもらいました。ここでいうコンピテンスとは，子どもたちが持っている有能感のことで，コンピテンスを測定するために桜井（1992）の児童用コンピテンス尺度を用いました。児童用コンピテンス尺度は「学習コンピテンス」「社会コンピテンス」「運動コンピテンス」「自己価値」という４つの因子から構成されています。学習支援実施前と実施後の得点について対応のあるｔ検定によって平均値を比較したところ，学習コンピテンスでは実施前よりも実施後に素の得点が上昇していることが示されました（図２）。

学習コンピテンス因子には「勉強はクラスの中でできる方ですか」というような成績に関する有能感を問う質問もありますが，「難しい問題にも挑戦してみますか」や「勉強は苦手ですか」といった学習への取り組み方についての有能感を問う質問が含まれています。つまり，成績に対する評価だけではなく，学習に向き合おうとする気持ちに対する評価が含まれていると言えます。そうした学習コンピタンスに肯定的な変化が見られていることは，この実践が対象となった子どもたちに一定の効果をもたらすことができたことを示していると考えられます。

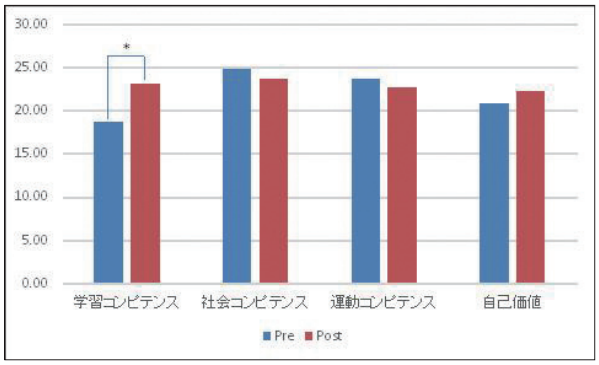


図２　コンピテンス尺度の変化

こうしたことから，本実践における児童養護施設における学習支援の取り組みでは子どもたちの学習成績を向上させる事には至らなかったものの，子どもたちが学習することを楽しいと思えるような気持ちを持ってくれるような支援を行うことができたと考えられます。この取り組みでは子どもたちが楽しく学習に取り組んでくれることはもちろんのことでしたが，学習支援者である学生自身もどうしたら子どもたちと楽しい学習の時間を過ごせるかということを考えました。虐待のような困難な問題を抱えている子どもたちと学習をする際には，学習支援者自身が子どもと共に楽しむ姿勢を持つことが大切だということを学びました。

今後はそうした学習の楽しさが，実際に学習成績の向上につながるように学習支援を続けていきたいと考えています。

文献

長尾真理子（2010）被虐待児に対する学習支援についての事例研究 - 援助関係形成プロセスに焦点を当てて -，人間性心理学研究，28（1），77-89.

Rowe,E.,&Eckenrode,J.（1999）The timing of academic difficulties among maltreated and non-maltreated children，Child Abuse and Neglect，23，813-832.

桜井茂男（1992）小学校高学年生における自己意識の検討，実験社会心理学研究，32，85-94.

澤入麻名美（2009）児童養護施設と家庭の子どもたちの学習時間，運動・健康教育研究，17（1），119-121.

Vondera，J.,Barnett，D.，& Ciccihetti,D.（1989）Perceived and actual competence among maltreated and comparison school children，Development and Psychopathology，1，237-256.

2

大学と保護者と親の会の連携による発達障害児への学習等支援活動「きんもくせい土曜教室」

大塚 玲 ｜ 教育学部教授
岡田 実侑・市川 夏海・真田 千穂・滝沢 里奈 ｜ 教育学部特別支援教育専攻４年

１．活動の経緯

「きんもくせい土曜教室」は、静岡県ＬＤ等発達障がい児・者親の会「きんもくせい」、発達障害のある小学生の保護者、教育学部教員（大塚）と学生ボランティア（特別支援教育専攻学生）が連携して実施している発達障害児への学習等支援活動です。

平成 11 年に始まった「きんもくせい土曜教室」は、今年度で 16 年目を迎えました。それまでの特殊教育から特別支援教育への転換を図るため、文部科学省が「特別支援教育の在り方に関する調査研究協力者会議」を設置したのは、その２年後の平成 13 年の秋です。当時、発達障害の社会の認知度は低く、学校の教員でさえ、発達障害のある子どもたちの存在を十分認識していませんでした。また学校だけでなく、地域にもこうした子どもたちの支援の場は限られていました。

当時、親の会「きんもくせい」から学生ボランティアによる発達障害のある子どもたちの支援活動の要請を受けた筆者は、以下の３つの目的を掲げ、「きんもくせい土曜教室」の活動を開始しました。

① 発達障害のある小学生に個別の学習指導と小集団でのソーシャルスキルを学ぶ場を提供すると共に、子どもたち同士の交流を図る。

② 障害児教育（特別支援教育）を学ぶ学生に臨床的指導及び実践的研究の機会を提供し、専門知識と実践的技能を有する専門家の養成に貢献する。

③ 発達障害のある子どもをもつ保護者同士の交流の場を提供し、専門家とのネットワークを広げ、こうした子どもたちの理解や支援の輪を広げる。

「きんもくせい土曜教室」は、支援する側とされる側という一方向のものではなく、大学教員と学生、保護者、子どもたちそれぞれがこの活動を通して、学びを経験していくことを目的として始まったのです。

２．活動の概要

本年度の参加者は、発達障害のある小学生 12 名（6 年生３名、5 年生４名、4 年生２名、3 年生３名）とその保護者 12 名、学生ボランティア 20 名（教育学部 4 年生８名、3 年生７名、2 年生５名）、スーパーバイザー３名（研究室の卒業生で、特別支援学校教員２名、大学院生１名）、そして運営責任者の大学教員（大塚）です。

学習の様子

クリスマス会の様子

活動内容は、個別の学習指導と小集団活動です。

活動日時は、原則として毎月２回、土曜日の午前中です。今年度の活動は、平成 26 年４月 26 日（土）～平成 27 年２月 14 日（土）の間に計 20 回行いました。なお、通常実施する学習指導と小集団活動に加え、夏休み前には昼食会、12 月にはクリスマス会、活動最終日にはお別れ会を行いました。また、８月には午前午後かけての夏期勉強会も実施しました。

３．個別の学習支援

個別の学習支援では、子ども１名につき学生１または２名が学習指導を行います。担当学生と子どもの組

み合わせは年間を通して固定させます。本活動に参加しているほとんどの子どもは、学校での学習になんらかの困難を抱えています。学生は子どものペースに合わせ、その子に適した教え方を工夫します。トークンカードやふり返りシート等を用いたり、認知特性に応じた教材を学生が作成したりすることで、子どもひとり一人に合わせた学習支援を試みています。

4．小集団活動

小集団活動は、学年や男女構成、行動や認知の特徴等を考慮し、６名程度の２グループに分けて実施しました。学生は個別学習で指導している子どもと同じグループに所属します。

小集団活動では、まずはゲームなどの活動を通して、他人と関わることの楽しさを経験してもらいたいと考えています。そのうえで、話の聴き方や、意見の伝え方、話し合いの仕方といったソーシャルスキルやコミュニケーションスキルを身につけることを目的とする活動を行います。相手の話を聴く時の４つのポイント（相手の目を見る、背筋をのばす、手はひざ、足は地面に付ける）や、話し合いで「○○さんはどう思う？」と相手の考えを尋ねることなどを、毎回の目標としてゲームに取り組みます。

リズムに合わせて友達の名前を呼ぼう

声を掛けてパスをつなごう（風船バレー）

5．本活動の成果と課題

本活動に参加した子ども、保護者、学生のそれぞれ立場から活動の成果と課題を考察します。

まずは子どもの学習面での成果です。本活動は月に２回というわずかな時間の指導なので、残念ながらこれによって学力面で明らかな向上がみられるというまでは至りません。ですが、その子のペースや認知特性に応じた個別の学習支援によって、子どもたちは苦手教科や分野にも取り組もうとする姿勢がみられるようになったり、これならできるといった自信を持つことができるようになったりしました。

また、学校のクラスの中では同級生とのトラブルが多かったり、同級生とのつきあいに苦手意識をもつ子どもたちが、小集団活動では見違えるような活発な姿や笑顔をみせます。学校とはちがって本来の自分をだしても許される場所となっているのです。

学生は、毎回指導案を作成し、目標と手立てを検討することを通して、授業作りの技能を学ぶことができました。また毎回、保護者に担当の子どもの学習の様子や小集団活動の様子を伝えたり、指導方針を話し合ったりするなど、教育実習では得られない保護者への対応を学ぶ貴重な機会にもなっています。

保護者にとって、本活動は学校ではできない個別指導等を受けられるというメリットだけでなく、同じ悩みをもつ保護者の交流の場として機能しています。本活動を通して知り合い、活動を終了した後もお互いに連絡を取り合ったり、長くつきあっている家族も少なからずいます。

親の会にとって本活動は、新たな会員の獲得と組織活性化の機能を果たしています。当初、本活動は親の会に所属している子どもたちを対象として始まりましたが、最近では本活動に参加するために親の会に入会するという現象が起きています。特別支援教育が開始され、発達障害児に対する支援の場も徐々に整備されてくるとともに、親の会に入会しなくとも多くの情報を得ることができるようになり、入会者が減少しています。本活動は、親の会の運営を支える人材を養成する役割の一端を担っているともいえるのです。

3

敷地でまなび、世界をつなぐ「しきじ土曜倶楽部」支援プロジェクト

河村 道彦 ｜ 教育学部准教授
長井 亮太 ｜ 教育学部英語教育専修４年

「しきじ土曜倶楽部」では、教育活動を通じた地域貢献の一環として、教育学部の学生たちが磐田市豊岡地区の人々と協働して地域をあげての子育てに取り組んでいます。以下では、「しきじ土曜倶楽部」の概要と本年度の活動内容を紹介します。

「しきじ土曜倶楽部」の概要

磐田市豊岡東地区（旧磐田郡豊岡村敷地）は、地域の子供たちを地域全体で育てる「敷地教育」の伝統を受け継ぐ土地です。「しきじ土曜倶楽部」は、過疎化や高齢化が急速に進む地域の教育力を高め、若い世代にとって魅力のある地域にしたいという熱意から生まれた活動で、地域住民の立ち上げた NPO 法人しきじ土曜倶楽部が管理、運営にあたっています。

「しきじ土曜倶楽部」では、毎週土曜日の午前中、豊岡地区、富士見地区の子供たちが豊岡東小学校に集まり、教育学部の学生が先生役として英語活動や総合学習の指導を行います。

この活動が始まったのは 10 年以上前のことです。平成 14 年度の学校完全５日制導入を前に「子供たちの受け皿を作りたい」と旧磐田郡豊岡村の有志が静岡大学を訪れ協力を依頼し、英語教育専修の学生数名が支援に名乗りを上げたことに始まります。学生たちの積極的な取り組みにより、息の長い活動として続いています。

現在では組織化されたグループによる主体的な取り組みとして、毎年 20 名以上の学生が地域住民と協働して子供たちの育成に取り組んでいます。

本年度の実施体制

本年度は４月 13 日の始業式から３月 15 日の修了式まで 40 回の活動を行いました。本年度から児童の数が増え、豊岡地区だけでなく富士見地区の児童も加え、幼児を含めた合計 67 名の子どもたちが参加しました。子どもたちは学年によりＡ組（年長～１年）、Ｂ組（2 年～３年）、Ｃ組（４年～６年）の３クラスに分けられ、通常の活動は基本的にクラスごとに行います。

本プロジェクトに参加し、子どもたちの指導にあたった学生は、いずれも英語教育専修の学生で４年生 10 名、3 年生８名、2 年生 12 名、1 年生７名の 37 名です。子どもたちと同様に学生たちも担当するクラスに応じて３つのグループに分かれて活動しました。

始業式

特別な行事のない週は、各グループから２名、計６名が交替で参加します。学生たちは早朝に大学を出発し、現地スタッフと打ち合わせのあと、２人１組で先生役となり英語活動と総合学習の指導にあたります。クラスごとに予め準備した活動計画に従って活動を行い、終了後は連絡ノートを用いて保護者に子どもの様子を伝えます。午後は現地スタッフをまじえた反省会が開かれ、地域の自然や文化を通じて成長する良い機会にもなりました。

学生たちは大学でも、毎週月曜日の昼休みに集まってしきじ会議とよばれる活動を行っています。活動に参加する学生全員が集まり、グループごとに前回の活動を担当した者が活動の内容と子供の様子を報告し、引き継ぎと気づきの共有を図ります。次回の活動を担当する者はこの会議の内容をもとに活動計画を作成します。本年度は、秋山栄奈、鈴木智也、石井志穂の３人が各組の代表としてグループをまとめ、学生代表の長井亮太が全体を統括しました。

本年度の活動

本年度は「かがやく笑顔」という目標のもと、さまざまな活動に取り組んできました。この目標は、しきじ土曜倶楽部が子どもたち、学生、地域の方々がお互いに影響しあい、支えあい、活き活きと活動できる場となるようにという願いを込めて立てられました。普

中国から来た留学生との交流会

段の活動や、地域の方々との交流を通じ、子どもたちとともに学生も成長する良い機会となりました。

活動は通常活動と特別な行事があり、通常活動では英語活動と総合学習を行います。

総合学習では季節に応じた活動や運動、行事の準備などを行ってきました。活動は、A 組は塗り絵や折り紙、B 組はプラ板作り、C 組はオリジナル写真立て作りなど、A、B、C それぞれの組の児童、幼児の発達段階にあったものを行います。

英語活動では、毎週来て下さる ALT の先生とともに活動しています。英語活動においても子どもたちの発達段階に合わせた活動を考えています。A 組はアルファベットを中心に学び、B 組では簡単な表現に親しみ、C 組ではいくつかの文で自分の思いを発信する活動を行いました。活動中に積極的にメモを取り、家に帰ってから復習をしている子どももおり、その様な姿勢が他の子どもを刺激し、高めあう姿も見ることができました。

通常活動以外にも、始業式（4 月）、梅ジュース作り（6 月）、山と川・環境学習講座（公民館行事、7 月）、七夕会（7 月）、第 1 回留学生交流会（8 月）、流しそうめん（8 月）、第 2 回留学生交流会（9 月）、ハロウィン会（10 月）、第 3 回留学生交流会（11 月）、クリスマス会（12 月）、新年会（1 月）、植樹体験（1 月）、しきじ祭り（2 月）、よさこい体験（2 月）、豚汁作り（2 月）、修了式（3 月）など、さまざまな行事を行いました。

ここでは本プロジェクトの助成により実現され、子どもたち、学生、地域の方々にとって有益であったと感じることのできた留学生交流会と里山での植樹体験について紹介します。

本年度の留学生交流会では、英語を使うことに拘らず、異文化に触れること自体を目標としました。最初の 2 回は、中国からの留学生をゲストに迎えて行いました。周さん、唐さん、李さん、張さんの 4 人の学部生が協力してくれました。英語を勉強するということは他の国との交流にもつながります。そうしたうえで、他の国の文化に触れることは子どもたちにとって自分の世界を広げる良い機会となります。また、最近はメディアなどの影響で中国に対する悪い印象を持っている人が多いですが、そういったことを鵜呑みにせず、自分の経験に基いて判断する態度を養おうと思い、本活動を企画しました。最後の交流会は、昨年度に続き、文部科学省の教員研修留学生として教育学研究科で学ぶラオス人のブンタンさんを講師に招き、ラオスの言葉や文化について学習しました。

中国人留学生 4 人との交流会では、中国の文化と日本の文化の違いに目を向け、留学生が日本に来て驚いたこと、日本と中国での漢字の意味の違いなどを紹介するクイズを行い、日中の相違点について理解を深めたほか、留学生が子どもの頃よく遊んだゲームをしきじ土曜倶楽部の子どもたちと一緒に行いました。留学生の方々は日本語が堪能で、子どもたちも接しやすかったのか、積極的に発言する姿が見られました。子どもたちからは日中の違いに驚きの声が絶えず、異文化に触れる良い活動になったと思います。最後には留学生への感謝の気持ちとして、交流会以前の活動で作ったプレゼントを渡し、交流会を終えました。

ラオス人のブンタンさんとの交流会では、この 1 年の日本での様々な経験について語っていただいたほか、ラオス語での挨拶、動物など簡単な言葉を教えていただきました。子どもたちは昨年度のことを覚えており、ブンタンさんが来ると笑顔で迎えてくれました。

ラオスから来たブンタンさんとの交流会

里山植樹活動

流しそうめん

活動の最後にはブンタンさんに教えてもらった、ラオス語で「ありがとうございました」を意味する「コプチャイ・ライライ」という言葉を自主的に彼に言いに来る子どももおり、子どもたち、学生、留学生全員で充実した時間を過ごすことができました。

植樹活動では、普段しきじ土曜倶楽部の活動をしている豊岡東小学校裏にある里山を管理している方々に協力していただき、子どもたちが地域の方々と交流し、自然とかかわる機会を設けることができました。里山の方々の指導の下、ハナモモの苗木を植える活動の中で子どもたちは積極的に里山の方々と共同作業を行い、地域貢献を果たすことができました。また、苗木を運ぶ際や斜面での植樹の際は、上級生が下級生の安全を心配する姿が見られるなど、異学年間での交流も盛んにおこなわれていました。中には自分が植えた苗木について、定期的に成長を見に行きたいと話す子どももいました。今回の活動の後、保護者を通じて子どもたちが家に帰った後、植樹活動が楽しかった、またやってみたいと話していたことを知り、自然や環境について考える良い活動になったと感じました。

この他に、本プロジェクトでは、キャンパスフェスタ in 静岡にて「出張・しきじ土曜倶楽部」なる企画を催し、日頃の活動を紹介するパネルを展示するとともに、キャンパス周辺の児童を対象に活動の実演を行いました。

食育

活動の成果と今後の取り組み

しきじ土曜倶楽部の活動は、学生、子ども、地域がそれぞれ影響しあうことによってともに成長していくことができるものであり、大学と地域の連携の望ましい在り方の一つであると考えています。事業に参加する教育学部の学生は、活動を通して子どもたちが成長していく中で自身も指導技術を磨き、子どもたちや地域の方々と接することにより、自分たちの教員としての資質を磨くだけでなく、人間性を磨き、高めることができます。こういった実践的な活動の場は多くはなく、この貴重な機会を今後も大切にしていきたいと思います。

Xマスカードの製作や英語指導

「土曜倶楽部」静岡大で出張講座

土曜日を利用して幼児や児童に英会話などを教えるNPO法人「しきじ土曜倶楽部」は15日、静岡市駿河区の静岡大静岡キャンパスで、一日出張講座を開いた。大学祭の一環で、指導役として同クラブに関わっている教育学部英語教育専修の学生30人が、普段は磐田市内で開いている活動内容を紹介した。

ゲームしながら英語を学ぶ取り組みと、クリスマスカード作りのコーナーを企画し、地域のこどもたちや親子連れが参加した。

同倶楽部は、学校週5日制が実施された2002年に地元の有志が発足させた。同大4年の長井亮太・学生代表は「一教職を目指す学生にとっても、実践的な経験を積める貴重な場となっている」と話す。

一日出張講座でクリスマスカード作りに挑戦する参加者＝静岡市駿河区の静岡大静岡キャンパス

静岡新聞 平成 26 年 11 月 16 日朝刊

4

静岡県内の公共機関と協働する子どもたちのための造形プログラムの開発運営事業

川原﨑 知洋 ｜ 教育学部美術教育講座講師

1. はじめに

現在、図画工作科の授業時間数は削減傾向にあります。これに伴い、時間・予算・場所などの問題で、子どもたちが満足できる活動を提供することが難しい状況にあります。子どもたちが心と体を開放し、造形活動に浸ることのできる時間の提供が求められているのではないでしょうか。

大学と公共機関とが連携・協働し、学校や家庭では味わえないような記憶に残る造形体験を提供することが今回のプロジェクトの大きな目的です。大学生の発想力や行動力を活かしながら造形活動のプログラムを開発し、公共施設の有効利用を考えていくことで、地域の子どもたちがその空間や時間に浸るような体験が提供できるものと考えました。

今回は２つのプロジェクトを推進しました。１つは静岡市クリエイティブタウンま・あ・る（以下ま・あ・る）と連携して行った『お化け屋敷プロジェクト』です。もう１つは富士芸術村で富士市内の小学校教諭と連携して行った『泡プロジェクト』です。この２つのプロジェクトの内容と成果についてそれぞれ報告していきたいと思います。

2. お化け屋敷プロジェクト ーま・あ・るでの実践ー

ま・あ・るは子どもたちの自主性や自治を大事にしながら様々なイベントやプログラムを提供している子ども施設です。このお化け屋敷プロジェクトは数回に分けて行う特別プログラムとして、ま・あ・ると共同で企画・実施しました。七夕まつりが開催される７月５日（土）６日（日）の２日間に合わせ、ま・あ・るでは一般市民に施設を夜間に開館する「ナイトま･あ･る」という企画の一環としてお化け屋敷プロジェクトを行うこととなりました。このプロジェクトには市内の小学校１年生～６年生の約 60 名の子どもたちが参加しました。４月から定期的に子ども会議を行い、ま･あ・るの多目的ホール（約 80 ㎡）内でお化け屋敷を制作しました。子どもたちの制作を補助するため、美術・デザインを学ぶ４名の学生もスタッフとして参加しました。また、施設の近隣にある清水銀座商店街がお化け屋敷を制作する際のテーマとなりました。

(1) 第１回子ども会議　＜４月 26 日（土）＞

まずは参加する子どもたちにプロジェクトの主旨を説明しました。学生がファシリテーターとなり、７～８名のグループに分かれて商店街を探検し、お化け屋敷制作のためのヒントを探しに行きました。各チームにはデジカメを手渡し、必要なことをメモ書きしました。最後に、宿題として商店街を探検したことをヒントに、商店街の中に潜んでいるお化けを具体的に絵にしてくるようにしました。

清水商店街を探検し、お化け屋敷のネタを集める

(2) 第２回子ども会議　＜５月 24 日（土）＞

学生がファシリテーターとなり、宿題で考えてきたお化けを全員で共有し、そのお化けをどのように作ることができるのか、どのように怖がらせることができるのか、具体的なアイデアをチームごと考えました。まとめとして、考えたアイデアを参加した子どもたち全員で共有しました。またお化け屋敷に必要な小道具を制作し始めました。

お化け屋敷の具体的なアイデアを考える

(3) 第３回子ども会議　＜６月 15 日（日）＞

学生がファシリテーターとなり、お化け屋敷に登場するお化けや驚かすのに必要なしかけや小道具等を制作しました。まずは１人１個ずつ提灯のお化けを制作しました。また、会場となるホールに可動壁面を設置し、完成した小道具などを設置しました。

お化け屋敷セットの制作

(4) 第４回子ども会議　＜６月 22 日（日）＞

お化け屋敷のセットの仕上げを行いました。来館者の人々をさらに驚かせるための工夫をチームで話し合いながら、セットや衣装、動き方などを修正していきました。学生がファシリテーターとなり、当日の動きを想定しながら驚かすタイミングなどを細かく確認し、何度もリハーサルを行いました。

お化け屋敷のリハーサル

(5) お化け屋敷当日　＜７月５日（土）-6 日（日）＞

当日は衣装を着る前にメイクをしました。お化け屋敷として解放した時間は 180 分間（45 分毎 10 分間の休憩）という長時間に渡りましたが、子どもたちは夢中になってお化け役を楽しんでいました。

お化け屋敷を制作する体験はもちろん、人はどのような時に驚くのか？どうすれば怖がるのか？というアイデアを話し合い、実際の空間でシミュレーションを繰り返しながら試行錯誤していく過程は学校や家庭では味わえないダイナミックで楽しい経験だったと思います。2 日間のお化け屋敷プロジェクトの来館者数は約 800 名でした。

お化け役の子どもを学生スタッフがメイクする

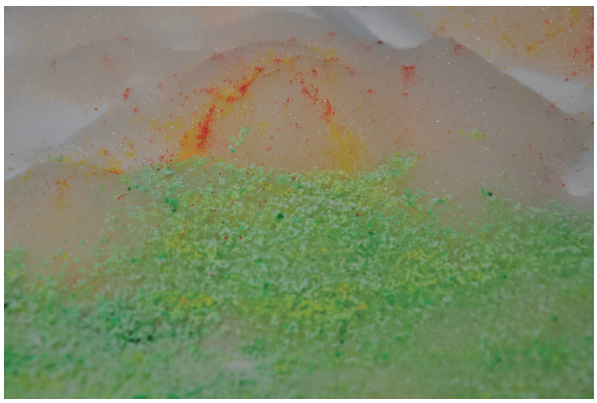
様々な工夫で来館者を驚かせるお化け役の子どもたち

3. 泡プロジェクト　- 富士芸術村での実践 -

富士芸術村では毎年８月の上旬に小学生を対象とした「ぼくも私もアートする」というアートイベントを開催しています。この施設は古民家の屋内展示スペースと屋外イベントスペースを持ち、定期的に企画展や造形プログラムを提供しています。アートイベントには市内の小学生が 40 名ほど参加し、富士市内の小学校教諭と美術･デザインを学ぶ学生 10 名ほどがスタッフとして参加しました。今回は屋外で行う造形活動について担当しました。最終的な色や形が残る造形活動が多い中､今回は時間とともに姿を消してしまう「泡」を用いた造形活動を提案しました。「泡」は準備時間や場所や環境の問題などがあり、学校現場や家庭ではなかなか実践することの難しい題材をあえて提案しました。

(1) 泡の教材開発

泡をどのように作るのかについて、学生スタッフと検討することから始めました。洗濯洗剤、洗濯のり、食器用洗剤、ボディーソープ、石鹸など泡立つあらゆるものを試しました。その結果、肌荒れの心配がなく安全性の高い石鹸をベースとして、泡立ちネットや気


様々な素材で泡の造形を試みる

泡の大きなスポンジ、泡立て器を利用し、泡がある程度できたところでグリセリンを混ぜ合わすことで、腰の強い泡を作ることができることが分かりました。さらに、泡に色紅を入れることで色を付けることもできました。また、スタッフの方であらかじめ泡を作って子どもたちに提供することも考えられましたが、泡立てる過程も非常に感触が良く、子どもたちも興味を持ってくれるのではないかということで、泡を作るところから造形活動と位置づけました。

(2) 造形プログラム会議　＜７月 19 日（土）＞

富士市内の小学校教諭と静岡大学の学生が集まり、当日行う造形プログラムの内容について打合せを行いました。若手教諭や大学生ならではの柔軟な視点と、ベテラン教諭の知識とがクロスしながら有意義な話し合いの場がもたれました。それぞれの教諭が学校現場で行ってきた授業実践の紹介や、今後行ってみたい教材についての検討が行われました。小学校教諭にとっても、これから教諭を目指そうとする大学生にとっても、教材開発の新たな視点の獲得という点で今回のプロジェクトは意味深いものだと考えます。

小学校教諭と学生合同の教材研究

(3) 泡プロジェクト＜８月２日（土）-3 日（日）＞

屋外での活動を想定していたため天候が心配でしたが、当日は晴天に恵まれました。子どもたちは８名ほどのグループに分かれ、まずは泡を作る体験から始め、徐々に泡が出来上がったタイミングで、あらかじめ用意しておいたトンネルに泡を付着させていきました。泡のトンネルが出来上がったところで、子どもたちは順番にトンネルの中を行き来するような行動をとり始めました。そのうちに体全体を使って泡の感触を楽しむようになり、大人スタッフも子どもも全身泡まみれになりました。

この泡を使った造形活動は予想通り時間がかかりました。また、十分に広い場所が必要なこと、最後には体についた泡を洗い流せるような環境があることなどが求められました。だからこそ、このような環境が用意されているイベントで行うことに意義があるように思われます。また多くの大人スタッフが関わることができるのも、このようなイベントの醍醐味だと思います。

泡まみれになりながら造形活動に浸る

4. まとめ

２つのプロジェクトに共通して実感したことは、学生スタッフがイベントに関わることによる影響力の大きさです。イベントに参加する子どもたちにとっても、施設職員や現役の小学校教諭に対しても良い影響を与えることができたと思います。また、学校現場の中で出来る範囲内での教材開発に留まることなく、本当に楽しい造形活動は何かという根本的なところから考えることができ、学生スタッフにとっても貴重な経験だったと思います。大学生の発想力や行動力を活かしながら造形活動のプログラムを開発し、また公共施設を有効活用することで、心と体を解放できる体験を多くの子どもたちに提供できたと思います。

5

地域の小・中学校と連携した日本伝統音楽普及のためのアウトリーチ活動

北山 敦康 ｜ 教育学部教授
志民 一成 ｜ 教育学部教授、 長谷川 慎 ｜ 教育学部助教

1． 本プロジェクトに至る経緯と目的

平成 20 年の学習指導要領の改訂において、我が国の伝統音楽の取扱いが目玉となっているが、実際には様々な要因から、授業において歌唱や器楽など表現の活動として扱われることは、まだまだ少ないのが現状である。

これまで教育学部音楽教育講座では、附属学校を中心に長唄や民謡、能楽の連携授業を実施してきた。昨年度に引き続き、地域の小・中学校における教育プログラムを実施するとともに、今年度は、さらに静岡県県文化財団や静岡市教育委員会と連携をより強化し、伝統音楽の普及の道筋を定着化させることを目的として、本事業を行った。

2． 本プロジェクトの概要

教育学部で音楽教育を専攻する大学生に箏、民謡、能楽などの技能や知識を習得させ、「和楽器指導アシスタント」として小・中学校に派遣し、日本伝統音楽を取り扱う授業をサポートするというアウトリーチ活動を行った。静岡市教育委員会の協力を得て、静岡市内から学生の派遣を希望する小・中学校を募集したところ、今年度は 17 校の応募があったが、その中から箏は 4 校、民謡は 3 校の実施校を決定し、当該の小・中学校の教員とも連携して授業プランを企画・立案し授業を実施した。

また、静岡県文化財団との連携事業として、能楽師からレクチャーを受けた大学生が小学校へ出向き、自らが立案した指導案にもとづき授業を行った。以下、それぞれのアウトリーチ活動について概要を述べる。

3． 伝統音楽授業への学生アシスタントの派遣

(1) 箏の授業実践

箏の実演家でもある長谷川が、これまで行ってきた学校での表現と鑑賞の指導について「実演家」のノウハウを合わせて箏の指導をしてきた。その成果を元に平成 26 年 12 月より静岡市立大谷小学校、同葵小学校、同中島小学校、同安倍川中学校において学生による箏の器楽授業を行った。長谷川の指導の下で学生が授業案を作成し、打ち合わせ過程で実施校音楽科教員に事前指導を依頼して授業案の再検討を行い、それに長谷川が学生と教員に対しコメントし、大学教育と学校教育の意見が反映された形で授業が実施された。和楽器指導において学習指導要領に示されている「音色」「姿勢」「音楽と言葉」「間」を重視した授業を展開し、児童生徒が充実した響きで箏が演奏できることを目指した。授業の最後には長谷川が演奏し、鑑賞した生徒の振り返りに「爪を少しあてるだけで小さい音にしたりせんさいだと思いました。」「演奏の中心のところは速く最後は遅いという日本の音楽だなと感じました。」と表現と鑑賞により箏の魅力を伝えられた授業となった。

静岡市安倍川中学校での箏授業

(2) 民謡の授業実践

附属浜松小学校では、平成 25 年度から民謡の授業を実施してきたが、平成 26 年度には、《こきりこ》と《ちゃっきり節》の授業を行った。この際、平成 25 年に開催された「ちゃっきり節日本一全国大会」少年少女の部でチャンピオンに輝いた、静岡市内の小学 4 年生、門井舞映さんが唄った動画や音源を範唱として用いた。さらに、舞映さんからの民謡を唄う際のアドバイスが入ったメッセージ･ビデオも活用され、授業後、児童からお礼の手紙と授業で収録した《ちゃっきり節》のビデオが舞映さんへ送られた。

平成 26 年 10 月には、附属静岡小学校で民謡授業を行った。

附属静岡小での≪こきりこ≫の授業

４年生は《こきりこ》、５年生では《ソーラン節》を扱ったが、こちらでも門井舞映さんの範唱音源を用い、iPad アプリケーションで範唱の音声波形と自分達の唄声の波形を見比べながら、舞映さんの唄に近づけることを目標として授業が展開。さらに、この民謡を扱った単元の締めくくりとして、４年生と５年生、そして静岡大学の志民研究室の学生らによる合同の民謡ミニ・コンサートを行い、互いの成果を披露した。

一方、アウトリーチ活動では３校に対して、民謡の授業に大学生を派遣した。平成 27 年１月 30 日に静岡市立観山中学校で《ちゃっきり節》、平成 27 年２月 23 日には玉川小学校で《こきりこ》、同玉川中学校で《ソーラン節》の実践を行った。

民謡の範唱用音源の収録風景

いずれの実践も、志民と指導学生が尺八・三味線・太鼓等で子ども達の伴奏をするとともに、大学の方で作成した、前述の小学生による民謡の範唱用音源や図形楽譜を使用して授業を行っている。また、これらの音源等は、希望する県内の小・中学校の教員にも提供しており、これら大学で開発した教材の授業での活用が始まっている。

４．静岡県文化財団と連携した能楽授業

県の文化財団とは、平成 23 年度に連携によるプログラムを実施した実績があるが、この実績をもとに、今回は附属小学校で実践を行った。

後学期の「音楽科教育法 IV」の授業で《羽衣》の「キリ」の謡の練習を開始し、12 月に能楽小鼓方大倉源次郎氏の他、２名の能楽師を講師に迎え、受講学生対象に「触れてみよう能楽師」と題した事前レクチャーを実施した。それらの学びを元に平成 27 年１月 28 日、附属静岡小学校の５年生３クラスで授業実践を行った。授業は大学生が《羽衣》を範唱（暗記）し、部分に分けた謡をグループ学習で児童に指導し、最後には大倉氏の小鼓に合わせて「キリ」を謡ったりした。

５．成果

師匠というモデルに近付くことが伝承の基本となっている我が国の伝統音楽の学習においては、モデルとなるゲスト・ティーチャーを派遣したり、子どもと大学生が一緒に声や楽器の音色などについて追求していく機会を設定したりしてきた本プロジェクトの連携の形態は、これからの音楽教育における地域連携のあり方に示唆を与えるものと考える。

今後は、これを継続・発展させ、教師が自立して日本伝統音楽の授業を実施できるよう、支援と研修を拡大するとともに、高い指導能力を有する教員の養成も強化していきたい。また附属学校や地域の学校、教育委員会や県文化財団等との、さらなる連携の緊密化と拡張を図るとともに，授業実践の成果の検証を行いながら、それらの成果を地域の学校で広く活用できるよう還元していきたい。

学生、能楽の世界学ぶ

県文化財団がプログラム

静岡大

静岡市駿河区の静岡大で13日、県文化財団主催の「グランシップ伝統芸能普及プログラム」が開かれ、教育学部の3、4年生40人が能楽について学んだ。大倉流小鼓方十六世宗家の大倉源次郎さん、観世流シテ方の坂井音隆さん、一噌流笛方の小野寺竜一さんの3人が講師を務めた。大倉さんは三保松原にまつわる能「羽衣」の背景や世界観を解説した。

学生は、講師の指導で小鼓や謡の練習に取り組んだ。大倉さんは、小鼓の演奏は「息を合わせることと間を整えることが重要」と話した。

学生は、来年1月に同大教育学部付属小で能楽の授業を実践し、学んだ内容を児童に教える。

小鼓の演奏を体験する学生＝静岡市駿河区の静岡大

静岡新聞 平成 26 年 12 月 14 日朝刊

6

焼津市の NPO 法人イーランチと連携した「静岡版保護者向け情報モラルワークショップ」の開発・実践と普及

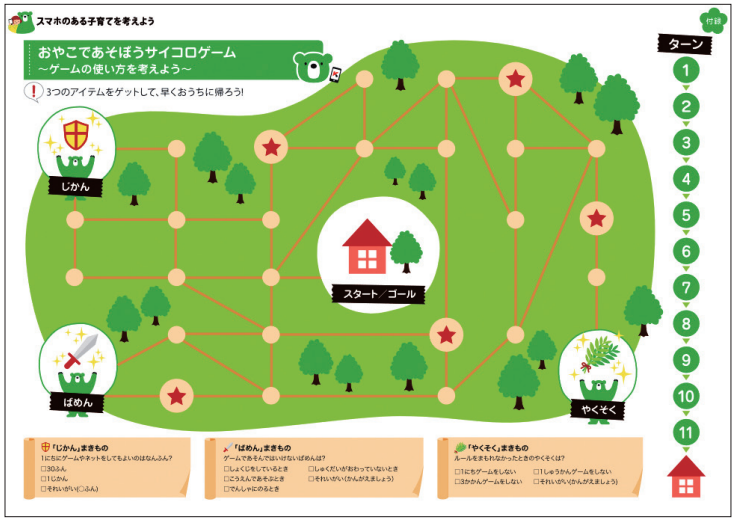
塩田 真吾 ｜ 教育学部講師
酒井 郷平 ｜ 大学院教育学研究科２年

はじめに

総務省「平成 25 年度青少年のインターネット利用環境実態調査」では，小学生の 36.6%，中学生の 51.9%，高校生の 97.2% がケータイ・スマホを所有しており，子どもたちのネットに起因するトラブルも増加しています。また，ケータイ・スマホだけでなく，小学校低学年における「テレビゲームの長時間接触（やりすぎ）」も重要な問題として指摘されています。

こうした問題に対して，家庭内における指導のあり方の重要性が言及されていますが，具体的な家庭内での指導方法が普及しておらず，単に「ルールをつくろう」という指導に留まっているのが現状です。

そこで本事業では，小学校低学年がメディアと上手につきあうことを目指して，焼津市の NPO 法人イーランチと協力して，親子で学ぶ情報モラルワークショップを開発し，実践を行いました。



開発した低学年向けボードゲーム

じかん・ばめん・やくそくをゲームで学ぼう

まず，今回は小学校低学年を対象とするということで，楽しくメディアとの上手なつきあい方を学んでもらおうと，ボードゲームを開発しました。このボードゲームでは，「じかん」，「ばめん」，「やくそく」を３つのアイテムとして，さいころをふりながら，既定の時間内（さいころを振る回数内）で３つのアイテムをゲットするというシンプルな内容になっています。

低学年の児童でも簡単に遊びながら，時間，場面，約束というルールづくりに必要な要素を意識することができるようデザインしました。

この開発したボードゲームを用いて，2014 年 10 月 4 日に小学生 1 ～ 3 年の親子 20 組、約 50 名を対象にワークショップを実施しました。ワークショップでは，NPO 法人イーランチ理事長の松田直子さんより，「ゲームがやめられなくなると，どうなっちゃうのか

親子でのボードゲーム体験の様子

な？」というミニセミナーを行った後，大学生がファシリテーターになり，ボードゲームを体験してもらいました。

ルールの「ズレ」を考えてみよう

ボードゲームで学んだ後は，親子で「じかん」と「ばめん」，「やくそく」というルールについて話し合います。ここで重要なのは，ルールの「ズレ」を考えるという点です。

従来ですと，例えば次のようなものが一般的にルールとして挙げられていました。

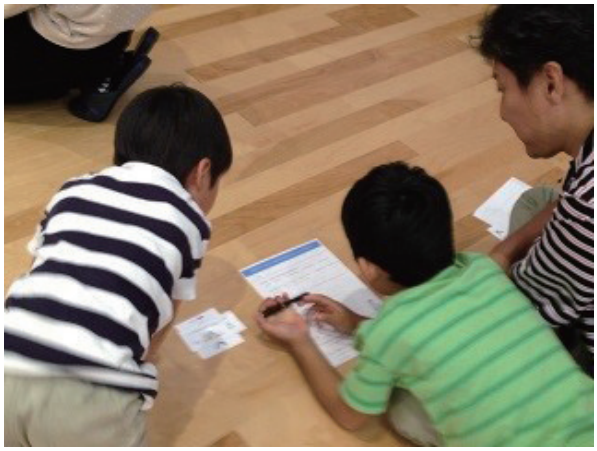
【従来のルール】
・ゲームは，やりすぎない
・ゲームは，外ではやらない
・ルールをやぶったら，ゲームは禁止

しかし，この従来のルールでは，子どもと保護者の間に「ズレ」が生じてしまいがちです。

例えば，「やりすぎ」とはどのような状態を指すのでしょうか。保護者が思う「やりすぎ」は 1 時間，子どもが思う「やりすぎ」は 2 時間だった場合，そこに「ズレ」が生じ，子どもは「やりすぎ」と思ってはいない状況で保護者に怒られることになります。同様に，「外ではやらない」の「外」もズレやすい表現です。一概に「外」と言っても，友だちの家，電車，新幹線などいろいろなケースがあるはずです（友だちの家ではダメだけど，雨の場合は OK など）。

そこで，今回のワークショップでは，次のような設定で，親子で「ズレ」について話し合わせることとしました。

【親子での話し合いによるルールづくり】
■ 1 日にゲームやネットをしてもよい時間は？
※休みの日は？
※時刻は？
■ゲームであそんでいけない場面は？
①宿題がおわっていないときは？
② 家族とでかけるときは？
※旅行のときは？
③自分の家で，友だちと遊ぶときは？
④友だちの家で，友だちと遊ぶときは？
※雨がふったときは？
⑤電車にのるときは？
※新幹線にのるときは？
■ルールをまもれなかったときの約束は？



親子でルールの「ズレ」を話し合う様子

単に，遊んでよい／悪いという話ではなく，こういう時には OK だけど，これはダメという具体的な話し合いが行われ，子どもの中には，自分が不利になりそうなルールでは，子どもなりに意見をたたかわせる様子も見られました。

参加者した保護者からは，親子でルールを話し合いながら決めていくことの大切さ，子どもとの「ズレ」を意識することの大切さについて理解できたとの声がありました。

今後は，こうした親子向けのワークショップを静岡県内，全国で実施していく予定です。

おわりに

本事業は，NPO 法人イーランチ，焼津ライオンズクラブの皆様と一緒に，「みんなでつくるネット社会 2014 ～親子でネットやゲーム機の使い方について考えよう～」の中で実施させていただきました。これらのご協力に深く感謝申し上げます。

7

遊びや体験活動を通して学びに熱中する子ども育成の場「ちびっこ寺子屋プロジェクト」

志民 一成 ｜ 教育学部教授
柴山 いづみ ｜ 大学院教育学研究科音楽教育専修２年

１．活動の経緯

本プロジェクトは、子どもの体験活動の機会が減少してきていることや、教育学部の学生が大学で学んだ専門分野を活かした実践を行う機会が少ないこと、地域住民のつながりが希薄になってきていることなどへの課題意識から活動をスタートし、今年度で４年目となりました。これまでの活動においても、教育学部の学生と地域住民とが連携して「五感学校」を開催し、「地域に根差した子ども育成の場づくり」に取り組んできました。また、複数の教科が共同で企画に携わる本プロジェクトの特性を生かして、複合教材の開発にも取り組んできました。それに加えて本年度は、さらに地域との連携を強くし、子ども・地域住民・学生の三者の交流を密にすることや、子どもの「人とのつながり」をより豊かにするために、子どもが主体的にかかわる活動を展開していくことも視野に入れ、活動を発展させていきました。

２．「ちびっこ寺子屋」プロジェクトについて

「子どもたちに遊びや体験活動を通した学びを提供すること」を目的として、地域の子育て支援団体「コトコトプロジェクト」と共同でイベントを開催し、その中の一つのブースとして、教育学部の学生が専門分野を活かしたワークショップを行う、「ちびっこ寺子屋」を実施してきました。

・第１回　流しそうめん祭り内「五感学校」
　2014 年 8 月 24 日　会場：玉川（静岡市葵区）
・第２回　大浜ビーチフェスタ内「ものづくり教室」
　9 月 21 日　会場：大浜海岸（静岡市駿河区）
・第３回　里山フェスタ内「五感学校」
　10 月 18 日・19 日　会場：足久保グラウンド（静岡市葵区）
・第４回　「秋の五感学校」
　11 月９日　会場：木藝舎 SATO（静岡市葵区）
・第５回「冬の五感学校」
　2015 年２月１日　会場：木藝舎 SATO

音楽科「しぜんの音色を楽しもう」

＜第１回　流しそうめん祭り内「五感学校」＞

安倍奥の会が主催する流しそうめん祭りの中で「五感学校」ブースとして出店しました。会場は自然あふれる安倍奥曹源寺坂（葵区玉川）で、川から拾ってきた石や小枝などを生かしたワークショップを実施することができました。

音楽科ワークショップ「しぜんの音色を楽しもう」では、石を木箱に並べてつくる「石琴（リンフォン）」や、好きな小石をフィルムケースにつめてつくる「小石マラカス」などの音色を楽しむ活動を行い、石の大きさや形によって微妙に変化する音色が大変好評でした。

また、美術科ワークショップ「自然をつかってまちを作ろう」においては、石を積んだり並べたり、また草花で飾ったり、ジオラマの人形を配置したりしてまちを作っていく活動を行いました。自由に発想してまちを作ることや、自然素材の感触に夢中になって離れない子どもたちの姿がみられました。

＜第２回 大浜ビーチフェスタ内「ものづくり教室」＞

毎年夏に大浜海岸の砂丘を利用して行われるイベント「大浜ビーチフェスタ」において、技術科によるワークショップを実施しました。圧縮木材（木材を加熱してから圧縮することにより、湯水に浸すと再び膨らむ）を活用したアロマストラップ作りを行い、アロマの匂いや、木材が膨らんで匂いを吸収していく様子に、子どもたちは興味津々なようでした。

技術科「アロマストラップ作り」

＜第３回 里山フェスタ内「五感学校」＞

里山保全活動などを行う NPO 団体「Groom 静岡」の主催する「里山フェスタ」において、「五感学校」ブースとして出店しました。音楽科ワークショップ「しぜんの音色を楽しもう」では、第１回に引き続き石を用いたワークショップを行ったほか、工房炭俵「福竹」の金丸さんから提供していただいた竹炭も用いて音色を楽しみました。さらに、民謡の稽古を積んでいる音楽科の学生による民謡コンサートも実施し、静岡県にちなんだ民謡などを披露した他、和楽器の体験コーナーも設置しました。

美術科ワークショップでも、第１回に引き続いて自然素材を用いたワークショップを行い、子どもたちは現地にある石や流木、草花、泥、水…などを素材に使って、人々（模型用人形）の住んでいる街を作っていきました。用意された素材を使いきった子どもたちが、自ら他の出展者のブースから木屑や竹などを調達してきて、まちづくりを発展させていく様子もみられました。

技術科のワークショップでは第２回に引き続いて圧縮木材を活用したアロマストラップ作りを行いました。

＜第４回「秋の五感学校」＞

音楽科・美術科・教育実践学の学生によるワークショップを実施しました。音楽科ワークショップでは、これまでの「石」、「竹炭」に加え、長さの異なる塩ビパイプで作成した楽器や、ワイングラスに水を入れて音階を作った楽器も用意し、さまざまな素材の音色を楽しめるよう工夫しました。

美術科ワークショップ「身近なものをつかってまちをつくろう」は、雨天ということで急遽室内での実施になり、NPO 団体 Hug Kumu さんの「2000 個の積み木ワークショップ」と合同で行い積み木や古紙、ジオラマ人形を用いたワークショップを行いました。狭い空間での活動となったことが逆に功を奏し、その場にいた他の子ども同士の関わりあいがうまれ、互いの造形や遊びを刺激しあっていたようです。

今回初参加となった教育実践学のワークショップ「グッズを釣って、防災バッグをつくろう」では、磁石を用いたさかな釣りゲームと防災の学習とを結びつけ、保護者の方からも関心を集めていました。

また今回は静大のボランティアサークル「ぐりーんぐりーん」も参加し、静大で伐採した竹を活用した竹細工のワークショップを行いました。

＜第５回「冬の五感学校」＞

音楽科・美術科・技術科・教育実践学の学生によるワークショップを実施しました。音楽科では「でんでんだいこ」を手作りするワークショップを実施しました。紙皿やお箸などの身近な材料を使って作ったでんでん太鼓は大変好評で、会場内でずっと手放さずくるくると回している子どもたちの姿が多くみられました。

美術科ワークショップでは、5m × 5m 程度の丘のように盛り土をされた屋外のスペースを使って、ジオ

教育実践学「グッズを釣って防災バッグを作ろう」

美術科「身近な素材を使ってまちをつくろう」

ラマ人形を配置し、自然物などを用いて街をつくるワークショップを行いました。新しい素材として爪楊枝とマスキングテープも用いたことや、これまでのワークショップと違い盛り土された地形上で活動を行ったことによって、子どもの試行錯誤をより多く発生させることにもつながっていました。

技術科ワークショップでは、「パタパタおもちゃ」作りを行いました。作りは簡単ですが、不思議な動きや、木の板のたてる音に、子どもたちは夢中になっていました。子どものために、やすりがけをがんばる保護者の方の姿もみられ、木の香りとともに温かい雰囲気のワークショップとなりました。

教育実践学のワークショップでは、第４回に引き続いて防災意識を高めるさかな釣りゲームを実施しました。さかなのイラストの裏には、防災バッグに入れるグッズの名前が書かれており、楽しみながら防災について学ぶよい機会となっていました。

３．プロジェクトの成果と今後の取り組み

本プロジェクトの活動も４年目となり、「五感学校」の認知度が広まったことで、ワークショップの参加者が各回 100 人（子どものみ）を超えるようになりました。それに伴って、スタッフの不足によるワークショップの準備や運営面での課題が浮上してきました。今後は課題を克服しつつ、本年度の活動でできた地域の方やＮＰＯ団体などとの結びつきを生かし、学生は知見を広げ専門分野の教材研究を一層深め、また地域の活性化にも供することができるよう、継続して活動を行っていきたいと考えています。

触って聞いて 楽しく遊ぶ

葵区で五感学校 子どもら夢中に

体験型の学びを提供するイベント「五感学校」が9日、静岡市葵区の多目的施設「木藝舎Ｓａｔｏ」で開かれた。会場に設けた音や絵を使ったさまざまな遊びのコーナーは、親子連れでにぎわった。

静岡大教育学部の学生 提供する「コトコトプロ 手作り楽器や、防災グッを中心とした「ちびっこ ジェクト」（葵区、大橋愛 ズについて学ぶ釣りゲー寺子屋プロジェクト」と、美代表）による企画。子ど ムなどに夢中になった。芸術家の発表の場などを もたちはパイプを使った ちびっこ寺子屋プロジ

釣りゲームをしながら防災グッズを学ぶ来場者＝静岡市葵区の「木藝舎Ｓａｔｏ」

ェクトは同大イノベーション社会連携推進機構の助成を受けて活動している。代表の柴山いづみさん（24）＝大学院教育学研究科＝は「小さい子どもを持つ母親たちも楽しめる場をつくっていきたい」と話した。

静岡新聞 平成 26 年 11 月 12 日朝刊

8

地域をつくる社会教育事業への参加プロジェクト
―シニアの教育力に学ぶ、学生の発想に学ぶ―

渋江 かさね ｜ 教職大学院准教授

はじめに

やきつべの里フォーラム（以下、フォーラム）は、焼津市東益津地区に在住または東益津地域の各団体に属する人からなる団体です（シニアの方が多いです）。以下４つを目的に、2001 年から活動をしています。①地域をフィールドとし、豊かな自然を慈しみ、温かな心を育む活動を展開する、②公民館、幼稚園、小・中学校と協力し、地域の子どもたちの健全な発達を促す、③会員相互の親睦を深め、地域の文化の高揚に寄与する、④地域の環境づくりに寄与する。

静岡大学教育学部では、社会教育実習（社会教育主事任用資格取得のための実習）として、フォーラムが関わる東益津公民館の事業に参加しています。今年度は 11 名の実習生が、「たけのこ掘り＆ふるさと探検」、「マイライス」、「高麗祭（東益津公民館祭）」に参加しました（表参照）。

表　2014 年度社会教育実習活動一覧

日程	内容
4/19（土）	たけのこ掘り＆ふるさと探検
5/17（土）	マイライス　もみまき
5/24（土）	マイライス　むろだし
6/14（土）	マイライス　田植え
7/19（土）	マイライス　草取り＆流しそうめん
8/16（土）	マイライス　かかし作り
10/25（土）	マイライス　稲刈り
10/31（金）	高麗祭　準備
11/1、2（土、日）	高麗祭
11/29（土）	マイライス　収穫祭
2/2（月）	生涯学習概論Ⅱで発表
2/11（火）	やきつべの里フォーラム 新春交流会で発表

今年度の社会教育実習は、つぎの２点を意識するようにしました。①社会教育活動を実践していく上での知恵をフォーラムのメンバーに学ぶ、②大学生としてフォーラムや公民館の活動に貢献する。

１．社会教育活動を実践していく上での知恵を学ぶ

（１）マイライスを通して学んだこと

マイライスの主な対象は親子です。私たちが口にしているお米ができるまでの過程を、目で見て、体を動かして、頭で考えて、親子で学んでほしいとの思いが伝わってくる事業です。フォーラムのメンバーから実習生が学んだ、社会教育活動を実践していく上での知恵は、つぎの３つに集約されます。

バッタを捕まえたよ

まず、稲の生長過程について、参加者が興味をもって考えるために、どのような知識と働きかけが必要かを学びました。５月のむろ出しの時に、育苗箱をむろから出すと、置かれていた位置が上か下かで、稲の生長の度合いが異なっていました。フォーラムのメンバーは参加者にこのことを指摘し、なぜ変化が出たのかと問いかけ、参加者が考える機会を提供していました。

つぎに、参加者が失敗した場合、本人に考える機会を与え、失敗から学んでいけるようサポートしていくことが重要と学びました。このことは、実習生が身をもって経験したように思います。８月のかかしづくりは、実習生も挑戦しました。イメージ通りの形にならず、苦心している実習生に、フォーラムのメンバーは答えを与えるというよりも、なぜうまくいかないのかと、問いかけていたと記憶しています。

最後に、フォーラムのメンバーは、参加者一人ひとりの興味関心を大事にして伸ばしていくサポートをしていると、実習生は見取ったようです。10 月の稲刈りでバッタに興味を示した子に、メンバーが応じていました。実習生もそこに自然と加わっていました。

（２）地域を知る、自分の地域に目を向ける

社会教育活動をする上で、地域を知ることは欠かせ

ません。参加した３つの事業は、焼津市や東益津地区を知る機会になるものでした。さらに、実習生は出身地域に目を向けるきっかけをもらいました。それは、フォーラムのメンバーの地域に対する思いにふれたり、東益津地区の名所に連れていっていただいたり、活動後にふり返りをする中で「あなたが食べるお雑煮の具は何ですか」など、出身地域に関わることを尋ねられたりする中で、生じたことでした。

マイライス終了後のふり返り

２．フォーラムや公民館の活動に貢献する

（１）高麗祭

高麗祭に参加した実習生の多くは、前日の準備から参加しました。マイライスでは当日の活動への参加のため、準備の大切さを知る機会になったと考えます。

実習生は、高麗祭に多少なりとも貢献できたのではないかと感じたようです。「仕事を与えられていない時間や、人手が十分足りている場合は、他に自分がやるべきことを考える」ことができたという実習生もいます。実習生のリーダー役を任された学生は、「学生たちをまとめ、子どもたちにも気を配りながら、自分の仕事をするのはとても大変でしたが、どの仕事が忙しいから人数が必要なのか、誰が休憩をとるタイミングなのかなどを考え、仕切ることができました」と言います。高麗祭を運営する地域の人や、手伝う中学生に触発され活動した結果、地域の人や公民館職員にお礼の言葉をいただけたことが、自信になったという実習生もいました。

（２）公民館のコンサートに参加する

実習生の中に、声楽を専門に学ぶ学生とピアノを専門に学ぶ学生がいました。そのことを知った公民館職員が、コンサートを依頼してくださいました。

実習生は東益津地域の方々を思い浮かべて、コンサートを企画しました。公民館、演奏者、来場者がつながるコンサートにしたいという思いもあったと言います。当日のコンサートは、マイライスのことや、連れていっていただいた東益津の名所のことが盛り込まれたトークを織り交ぜて進めるなど、社会教育実習での学びも生かされたものでした。

３．学んだことを自分たちの言葉で発信する

社会教育実習で学んだことを、ほかの人にも伝えるために、大学生とフォーラムのメンバーに発表しました。実習生は２グループに分かれ、準備を進めました。大学生への発表は、教育学部の科目「生涯学習概論Ⅱ」で行いました。教職を志す１年生が多く受講しています。「社会教育ってなぁに―社会教育実習を通して」というテーマで発表しました。受講者の感想の中には、社会教育を身近に感じられた、学校教育と社会教育の役割と双方の関係が理解できた、地域の社会教育活動に参加してみたい、といったものがありました。

フォーラムのメンバーへの発表は、新春交流会で機会をいただきました。「マイライス――社会教育の視点から」と題した発表の中では、先述のこと（本稿１参照）を学んだとの報告がありました。

生涯学習概論Ⅱでの発表

やきつべの里フォーラム新春交流会での発表

おわりに

私たちがくらす社会には、さまざまな課題があります。課題を解決する主体になること、解決するための仲間をつくり行動していくことが、私たちに求められていると考えます。

社会教育実習は、大学生がその力をつけるための機会となっています。地域にとっても若い世代の考えを知る機会、若い世代と共に考え活動する機会になっていけるよう、この実習を発展させていきたいと考えています。

9

「リベラルアーツカフェ～静岡の教養～」による「グローカル」をテーマとするカフェの実践

藤井 基貴 ｜ 教育学部准教授
宮田 舞 ｜ 東京大学大学院博士課程

リベラルアーツカフェ～静岡の教養～」は 2009 年 9 月に静岡大学の教員と学生を中心に創設されたカフェイベントである。平成 25 年度までに 28 回の開催実績を重ねてきた。リベラルアーツカフェでは開催当初より、以下 3 つの基本理念を大切にしてきた。①科学と社会の「双方向コミュニケーション」、②「Made in 静岡」のサイエンスカフェ、③地域社会に新たな学びの場を創出。そしてこれらの理念をどのような形で実現していくのか、スタッフ同士のミーティングや、他のイベントの視察やインタビュー、イベント参加者との交流を通して検討を重ねてきた。そうした中、2011 年度からは SPAC―（財）静岡舞台芸術センターの連携も開始され、現在も地域に学びの場を広げるという活動コンセプトを共有する諸団体との連携を深めている。

本年度は地域連携応援プロジェクトの支援を受け、「グローカル教育論」をテーマとするカフェイベントの実践に取り組んだ。リベラルアーツカフェでは、平成 24 年度にも同様のテーマを取り上げ、下記のゲスト講師を招いたイベントを実施している。（所属ならびに役職は平成 24 年度当時のまま記載）

・大澤真幸氏（社会学者 /SPAC 文芸部）
・苫野一徳氏（日本学術振興会特別研究員）
・御手洗瑞子氏（「気仙沼ニッティング」プロジェクトリーダー）

本年度の実践は、平成 24 年度の実践との連続性を狙ったものであり、「グローカル」というテーマをさらに異なる観点から捉えることが目標であった。一方で大きく異なる点は、本年度のイベントが前年度までとは異なり実際に「カフェ」という場で計画・実施された点である。カフェは 19 世紀フランスにおいて、ピカソ、ヘミングウェイ、サルトル、ボーヴォワールら芸術家や知識人が集い、様々な思想や運動が生み出された背景を担っていた（飯田 , 2011）。近年では日本でもサイエンスカフェや哲学カフェなど、カフェが担う側面が強調された企画が多く設計されてきたが、その多くは「カフェ」という空間をイベントで借りることに伴う困難から、実際には公民館や会議室、イベント会場として予め設えられた部屋等で開催されている。

しかしながら、西欧諸国に根差した「カフェ」の本来的な性質を活かしたいと願う「カフェ」は静岡に増えつつある。そうしたカフェの一つ、「スノドカフェ七間町点」が本年度の実践の会場となった。スノドカフェは“「共有する」をテーマに、アート・デザイン・音楽・フード・ファッション・エコなどを通して幅広くコミュニケーションできるサロン的スペース”として清水市狐ヶ崎で親しまれ、昨年 9 月に静岡市七間町に進出した 2 号店でも「カフェ」という空間を通した新たな文化の発信地としての成長が望まれている。リベラルアーツカフェのような活動が「カフェ」での文化発信への貢献としてどのように受け止められるのかについても、本年度実践を通して考察する必要があった。

第 29 回リベラルアーツカフェ フライヤー

古田到氏（国連世界食糧計画職員）

まず、本年度の実践内容を報告する。本年度は第29回リベラルアーツカフェ シリーズ「グローカル教育論」として、国連世界食糧計画職員の古田到氏をゲストに迎え、２時間（講演１時間・ディスカッション１時間）のカフェイベントを実施した。

古田氏はまず、アメリカの小学校に通った少年時代について語り始めた。そこでの徹底した実力主義、そして自ら考え主張することをベースとした教育を受ける中で、様々な疑問を持つ態度を身につけていった。大学生になった古田氏は、長期休暇のたびに世界を旅行し卒業までに 31 か国を巡った。卒業後２年の社会人生活を経て青年海外協力隊で活動し、その後再びアメリカへわたって修士号を取得。晴れて国連職員としての活動を開始した。

この日は特に南スーダンでの古田氏の体験を伺った。北部スーダンはイスラム教を信仰するアラブ系の人々に統治され、南部スーダンは様々な宗教、様々な部族が寄せ集められたような状態であり、南部スーダンの自治をめぐって内戦が続いていた。そんな中、市民は戦闘を避けて国中を逃げ回り、古田氏ら国連職員は彼らへの支援を行っていた。250 万人の被害者を出した内戦も 2011 年に南部スーダンの自治が認められ収束。しかし、それまで「国」という概念がなかった南部スーダンでは国内の最大部族が一方的な統治を行い、再び 2013 年に内戦が勃発。当時南スーダンに駐在していた古田氏はクーデターの銃声を聞き、内戦の真っただ中の国連施設で他の職員と共に一時身動きの取れない状態となったという。

古田氏から南スーダンの政治的状況を伺った後、古田氏と参加者らの間で様々な議論が行われた。戦争状態にある中で「比較的安全である」とはどのようなことなのか、様々な国籍の人々が集う国連という場所ではどのようなコミュニケーションが行われているのか、人道的支援のあり方とは、国際社会での日本人ならではの良さとは等多くの疑問が出された。リベラルアーツカフェでは昨年度の実践において「哲学カフェ」に挑戦したことから、疑問を単なる質疑応答に終わらせずより深い議論に発展させることを重視しており、本実践では様々なことを「考え」、個々人が「疑問を持ち帰る」ことができた会となった。「グローカル」という言葉が、“地球規模で考えながら、自分たちの地域で活動する”ことを意味することからも、問題を自分事とすることができるこのようなスタイルのイベントの有効性が確かめられたと言えよう。

リベラルアーツカフェはこれまで、様々な問いや議論が生まれるカフェ的空間をあくまで「カフェ外」に作りだそうと試みてきたが、本年度においては「スノドカフェ」の協力を仰ぐことで、より地元・地域志向の対話型イベントを開催することができることとなった。 その中でカフェ側からも、日本で、静岡で、そしてカフェという場所で対話型イベントという形で文化発信を進めることについて一定の評価を得ることができた。地域連携応援プロジェクトの目標であった ICT 活用については、イベントの制約上今年度は実践することができなかったが、本年度の実践を踏まえて、カフェ空間と ICT とのコラボレーションを成功させる要因を探っていきたいと考えている。

ディスカッションをする参加者ら

10

さあ、違いを認め合える私たちのまちへ。
～支援でつながる多文化共生の輪～

矢崎 満夫 ｜ 教職大学院准教授
千代 光愛・齊藤 りん・大森 マリア ｜ 教育学部３年

１．プロジェクトの背景と目的

静岡県には外国につながりのある人々が数多く暮らしています。2013 年度の静岡県多文化共生課の調査では、静岡県内の外国人は約 71,500 人であり、その数は全国第７位となっています。また、2012 年度の文科省調査では、「日本語指導が必要な外国人児童生徒」の数は2,488 人で、全国第３位と報告されています。以上のことから、静岡県内にはさまざまな言語や文化をもつ人々が暮らしていることがわかります。

私たちがふだん暮らしていく中で、人との関係を築くことは欠かせないことであり、それが得意な人、不得意な人もいるでしょう。しかし、そこに「ちがい」を持つ人が現れたとき、私たちはその人との関係を築くことに躊躇します。特に日本人とは違う見た目、生活様式、考え方を持つ外国人の多くは、日本の社会から孤立しがちな存在といえるでしょう。外国人も多く暮らす地域社会の中で、私たちが共に支え合って生きていくには、まずはお互いの「ちがい」を認め合うことが大切であると考えます。

こうした現状を踏まえて、私たちは地域の子どもたちやその保護者に対して、「ちがい」を認める「多文化共生」の考え方を伝えていくことを目的に、このプロジェクトを立ち上げました。

本プロジェクトの主な連携先となった NPO 法人 ONES（以下、ONES）は、静岡大学の学生を主体とした団体で、静岡市教育委員会等と連携し、主に外国につながる子どもたち（以下、外国の子ども）への支援活動を行っています。私たちプロジェクトチームは、この ONES とともに、県内において「多文化共生の輪」を広げることを目的として、「学校訪問型支援」「世界の遊び・スポーツ・料理による国際交流イベント」「絵本プロジェクト」の３つの活動を展開していきました。

２．学校訪問型支援の概要と成果

「学校訪問型支援」とは、外国の子どもが在籍する静岡市の小・中学校で、その子どものニーズに合わせて日本語や教科学習等のサポートを行うことです。それに加えて、外国の子どもが教師や周りの日本の子どもたちと良好な関係を築けるように、環境づくりの支援も進めています。静岡市教育委員会から支援が必要な子どもが在籍する学校の情報を受け取ると、学生メンバーがその学校に赴き、支援を行うという態勢を整えました。学校訪問型支援には、授業が行われている教室に学生が入り、外国の子どもの横について学習等のサポートを行う「入り込み型支援」と、授業とは別の教室で個別の学習を進める「取り出し型支援」の２種類の形態があります。今年度は計９名の学生が、６つの小学校で支援活動を行いました。

学生メンバーの支援報告からは、「学生が仲介役となり、外国の子どもが日本の子どもたちの輪に入って一緒に鬼ごっこを楽しみ、それが周囲との良好な関係をつくるきっかけとなった」「学生がポルトガル語を話せる子どもを褒めて周囲にアピールしたことによって、日本の子どもたちが『すごい』と思うようになった」などの事例が挙げられていました。このような学生メンバーの働きかけにより、外国の子どもに対する日本の子どもたちの関心や仲間意識が高まり、さらに外国に対する関心も増えたことがわかりました。また、外国の子どもたちにとっても、自身のルーツに対して自信を持つきっかけになったと考えています。

３．世界の遊び・スポーツ・料理による国際交流イベントの概要と成果

世界の遊び・スポーツ・料理による国際交流イベントは、世界の遊びやスポーツ、料理、音楽などの「ことば」にあまり依存しない交流活動を通して、文化的背景の異なる子どもたち同士の中に「多文化共生の輪を広げる」ことを目的としています。

今年度は昨年度に引き続き、富士市において当該イベントを行うことができました。富士市立富士第一小学校とブラジル人学校「エスコーラ・フジ」と連携して開催した結果、38 名の子どもたちが参加してくれました。活動内容は、ストレッチ兼アイスブレイクのゲーム、ブラジルの旗取りゲーム、あいさつゲーム、歌、絵本の読み聞かせ等でした。すべてのプログラムで日本の子どもと外国の子どもの交流を意識した働き

国際交流イベントの様子

クリスマス会の様子

かけを行いました。当日は外国の子どもと日本の子どもが同じチームでゲームに参加し、昼食を食べて交流を深めました。昼食の準備は、外国人の保護者、日本人の保護者、ONES の学生の三者で協力し合いながら行いました。昼食を一緒に作ることを通じて、異なる文化的背景を持つ保護者同士の自然な交流も生まれました。また、子どもたち同士は、休み時間に国籍も年齢も関係なくおしゃべりや追いかけっこをして遊ぶ姿や、困った時に同じチームの子どもたち同士で相談する場面等も見られました。事後アンケートでは、「また参加したい」と答えた子どもがほぼ全員であったことがわかり、「楽しかった」「新しい友だちができた」という声も聞くことができました。また、特に日本の子どもたちの外国や外国語への興味・関心が高まったこともわかりました。本イベントを通じて、「多文化共生の輪を広げる」ことのきっかけはつくれたように思います。

昨年度の本イベントの課題には、「子どもたちの間に生まれた関係性をどのように継続・発展させていくか」ということがありました。「継続」という点では、今年度の参加者のうちの半数以上が、昨年度も参加してくれた子どもたちであることがわかりました。昨年の出会いをこのイベントによって継続できたと考えられます。今後もこれを継続していくことにより、今回生まれた「多文化共生の輪」が、さらに地域にも広がることが期待できます。「発展」の点では引き続き課題が残りますが、今後はより多くの保護者や地域の人々が参加できるよう、働きかけながら進めていきたいと思っています。

4．絵本プロジェクトの概要と成果

絵本プロジェクトとは、主に ONES が制作したオリジナル絵本を用いて、子どもたちや保護者、地域の人々に読み聞かせを行い、多文化共生や異文化理解について考えてもらう活動です。「絵本」という媒体を通して、「多文化共生・異文化理解の種をまく」ことが目的となります。

今年度は、多文化共生・異文化理解の活動に携わる人々や、浜松の外国人学校と共に本プロジェクトについて考えていくことができました。NPO 法人ピュアスポーツクラブと連携して行ったクリスマス会では、参加してくれた子どもたちに、世界の様々なクリスマスを紹介する絵本の読み聞かせを行い、異文化理解について考えるきっかけをつくることができたと思います。

また今年度は、ONES が制作したオリジナル絵本『カラフル』と『みち』に込められたメッセージを、読み聞かせに参加する人たちにより深く伝わるよう、「アニマシオン」（「魂の活性化」の意味）の理念を取り入れた活動も行いました。「アニマシオン」の知識があまりなかった私たちは、学校で「アニマシオン」の授業を展開されている静岡市立安東中学校の笠井英彦先生をお招きし、社会科の模擬授業を実際に行っていただきました。そして先生と共に『カラフル』『みち』に込められたメッセージを伝えるための活動を考えました。そして、当該研修会での成果をもとに、浜松市にある外国人学校「ムンド・デ・アレグリア」で、ブラジル人とペルー人合計 16 名の小学 1 ～ 3 年生を対象に、『みち』の読み聞かせ活動を行いました。読み聞かせ後には、まず、国によって動物の鳴き声が違って聞こえることを紹介し、異文化に対する気づきを促しました。次に、日頃地域との接点の少ない外国人学校の子どもたちに、少しでも学外への関心を持ってもらうために、学校の周りの地域の様子がわかるゲーム活動を行いました。以上は研修会で考えた「アニマシオン」の活動でしたが、このように絵本をただ読む

だけではなく、絵本を生かした楽しい活動を取り入れることによって、より多文化共生や異文化理解への関心が高められるのではないかと思えるようになりました。

5．おわりに

「学校訪問型支援」「世界の遊び・スポーツ・料理による国際交流イベント」「絵本プロジェクト」の３つの活動は、一見それぞれが独立した活動のように思えますが、どれもが「多文化共生の輪を広げる」という１つの理念を含んでいました。以上の活動を通して、本プロジェクトの目的は、ある程度達成できたのではないかと考えます。

「ちがい」を認め合うということは、けっして日本人と外国人に限定したことではないでしょう。日本人でも外国人でも、子どもでも大人でも、男性でも女性でも、誰でもまずは隣にいる人との「ちがい」を知り、それらを認めていくことが、多文化共生への第一歩となるように思えてなりません。私たち学生にできることはわずかかもしれませんが、継続することを目標に、今後も様々な支援活動を展開していきたいと思います。

11

旧湯ヶ島小学校を利用した天城山周辺における自然環境資源の有効活用

徳岡 徹 ｜ 理学研究科准教授
齋藤 圭太 ｜ 理学研究科２年、石田 卓也 ｜ 理学研究科１年

事業の目的

伊豆半島天城山は富士箱根伊豆国立公園に含まれ、大規模な照葉樹林と落葉広葉樹林が広がる素晴らしい自然環境をもっている。この自然環境を最大限利用して、人材育成や地域と大学の連携を強化することを目的として事業を行った。

伊豆半島の中心部にある天城山は日本百名山にも数えられ、東の万二郎岳、遠笠山から西の天城峠までの連山を指している。この天城山は標高こそ最も高い万三郎岳で１４００メートルあまりであるが、標高８００メートル以上に大規模なブナ林が発達し、それ以下にはアカガシを中心とした照葉樹林が広がっている。また、天城山は 20 ～ 80 万年前の噴火活動によって形成された成層火山であり、万三郎岳の西に位置する皮子平火口がおよそ 3200 年前に噴火して北麓にかけてなだらかな斜面を形成している。これらの自然環境は植物学、生態学、地球科学を学ぶ上で非常に価値ある教材である。

天城山の西端にある天城峠にほど近い、伊豆市湯ケ島地区（旧天城湯ヶ島町）にはこの地区の協力を得て静岡大学理学部天城フィールドセミナーハウスが設立されている。このセミナーハウスでは天城山の自然環境を活かして理学部の学生向けに野外実習などが開講されて利用されてきた。一方、湯ケ島地区にあり、作家井上靖も通った湯ヶ島小学校は天城小学校に統合され、平成 25 年 4 月に閉校となった。この跡地は新たな文化施設として活用する計画であるが、具体的な活用方法は決まっておらず、伊豆市湯ケ島地区地域づくり協議会を中心として、その有効活用の方法を模索していた。そこで、この地区の豊かな自然環境を利用し、大学生や地域住民の方々が生物学や地球科学を学べる施設として、この天城フィールドセミナーハウスと旧湯ヶ島小学校を有効利用する方法を静岡大学理学部の本研究室と湯ヶ島地区地域づくり協議会が連携して検討することとした。

事業の内容

このような取り組みを始めるために、伊豆市湯ケ島地区地域づくり協議会と打ち合わせを重ねた。まず一年目の本年度は野外での自然観察会を 2 回開催し、旧湯ヶ島小学校跡地の活用として植物標本庫の整備とともに植物学を紹介する展示物の作製を行った。

１）自然観察会１（10 月４日実施）「秋の天城の自然観察会」

伊豆市道の駅「天城越え」から天城峠までの踊り子歩道を歩きながら秋の植物を観察する自然観察会を実施した。参加者の募集は伊豆市役所観光経済部と市役所天城湯ヶ島支所に協力していただき案内の資料配布を行い、また伊豆日日新聞の記事（9 月 25 日）による告知によって参加者の募集をおこなった。徳岡研究室の学生もガイドとして参加するため、コース沿い

天城フィールドセミナーハウスにて事前打ち合わせ

道の駅「天城越え」にて集合

踊り子歩道で植物観察

天城峠のブナ林

の植物の標本作製やその生態などを事前に詳しく調べた。当日は二十数名の参加者があり、道の駅に集合した後、踊り子歩道を通って天城峠へ向かった。途中で何回も止まりながら、植物の様々な形態や最新の植物分類体系などについて話した。また、逆にヒサカキをサカキとして用いていたことや、ヤマハンノキをワサビ田の日除けに利用していたことなどを参加者の方に教えていただいた。最後に天城峠のブナ林を観察して帰路についた。終始和やかに植物の観察を行い、研究室の学生や湯ヶ島地区の方々と楽しく交流できた。

2）自然観察会２（11 月９日実施）「皮子平噴火の痕跡を観察しよう」

静岡大学理学部石橋秀巳講師を招き、天城山皮子平で約 3200 年前に起こった巨大噴火の跡を観察した。参加者の募集は１回目の自然観察会と同様に行った。また、石橋研究室の学生もガイドとして同行してもらった。皮子平は天城山の最深部にあたる場所であるため、伊豆森林管理署から許可を頂き、借り上げバスで入林した。途中、バスを降りて皮子平噴火の初期に降り積もった火山灰の層や溶岩が冷えて固まった黒曜石なども観察した。更に進んで、皮子平噴火の溶岩源流部を歩き、過去に起こった巨大噴火を感じることができた。

事業の成果

２回にわたる自然観察会は概ね好評であった。参加者からは、普段と違う角度から植物や岩石を見ることができ一味違った観察会であったことや、身近にあるにも関わらず見ることができなかった天城の魅力を再確認したなどの感想があった。地元の方々と直接触れ合うことで、伊豆固有の植物の呼び名やその利用方法、現地の方しか知らない珍しい植物群落の情報などを得ることができ、今後の研究に活かせられそうであった。また、研究室の学生も実際に自分がガイドとして活躍することで、違う角度から植物や岩石を見ることができ、自分の専門分野への意欲が高まったようであった。

今後の地域への貢献

自然観察会の実施と旧湯ヶ島小学校跡地の有効活用のための検討を通して、大学と地域の連携をより深めることができた。これらの活動を更に発展させ、平成 27 年度以降、定期的に自然観察会や講演会を開催することとなった。

噴火初期の降下火砕物の地層を観察

黒曜石の観察

12

本が好きな子、集まれ！キッズチャレンジ静大図書館

松下 昭重 ｜ 学術情報部図書館情報課主任　キッズチャレンジ WG 代表

はじめに

このプロジェクトでは、地域の子どもの読書活動に貢献することを目的に、近隣の小学 5 年生 6 年生を対象に図書館資料を使って調べ物をする方法や図書館全般に共通した本の並び方、探し方などを楽しく学ぶイベントを行った。

イベントでは、未知の世界である大学図書館の様々な機能を知ってもらうことで、図書館全般や本についての興味を増し、静岡大学を身近に感じてもらうことを期待し、100 万冊を超える膨大な蔵書や、明治、大正、昭和初期の古い資料や海外の資料、それらの資料が規則正しく収められている秘密倉庫のような書庫、カウンタだけでなくバックヤードで行われている仕事なども紹介した。

実施イベントの概要

全 3 回、イベントを実施した。3 回ともほぼ同じ内容で行い、参加者は各回ごとに募集をした（表 1 参照）。各回とも募集人数を上回る応募があり、早めに募集を締め切った回もあった。

	第 1 回	第 2 回	第 3 回
実施日	8 月 8 日 (金)	12 月 24 日 (水)	12 月 25 日 (木)
場　所	静岡本館	静岡本館	浜松分館
募集人数	20 名程度	10 名程度	10 名程度
参加者数	25 名	15 名	11 名
アルバイト学生数	4 名	2 名	2 名
後　援	静岡市教育委員会	静岡市教育委員会	浜松市教育委員会

表 1　実施イベントの概要

このイベントにはストーリーを設定した。子どもたちは「キッズ探偵」、スタッフとして参加する学生はその探偵に情報を提供する「情報屋」、そして子どもたちは「探偵団」のメンバーと協力して、与えられた「ミッション」を遂行していく。収集した情報は「探偵ファイル」に書き込み、すべてのミッションがクリアできた「キッズ探偵」には、最後に「認定証」が渡される。

子どもたちに人気の本やアニメには探偵ものや推理ものが多くある。また本が好きな子に限らず、謎解きといえば、興味をもってくれる子どもも多いのではと考えた。

このプロジェクトを推進するにあたり、キッズチャレンジワーキンググループを館内で立ち上げた。イベントの準備は、そのメンバーを中心に行ったが、当日は会場までの道案内も含め図書館職員の多くが何らかの役割を担当した。

学生スタッフは、教育実習やアルバイト、課外活動などで子どもと接する活動経験がある学生がほとんどであった。その経験をもとに事前打ち合わせの際には、子どもたちがより楽しく取り組めるよう、多くの意見が出された。

また子どもを対象としたイベントを実施することは図書館としては初の試みであったため、静岡県立中央図書館子ども図書研究室の担当の方に、子どもを対象としたイベントの事例を教えていただいたり、近隣の小学校の先生を尋ね、このイベントに取り組むにあたって気を配るべき点など、貴重なアドバイスをいただいた。

イベント当日の様子

イベントの最初にしずっぴーと一緒に記念撮影を行い、その後、探偵団のメンバー内で自己紹介を行った。

用意したミッションは、1. 図書館探検　2. お仕事体験　3. 謎解きラリー「新聞で探せ」　4. 謎解きラリー「宝探し」の 4 本立てである。

（1）図書館探検

職員の説明を聞きながら館内ツアーを行った。通常、学部生も立ち入ることができない書庫にも入り、天井近くまで設置している書棚、そこに並ぶ膨大な冊数の図書、製本して保存された学術雑誌、電動集密書架に納められた旧制静岡高等学校の資料などを見たり、実際に手にとったりした。また 1 人で集中して学習するための個人ブースなど、大学図書館ならではの資料や施設を見学した。

イベント実施日は開館中であったため、館内で自習をしたり、グループで議論している学生の様子なども目にすることとなった。

「図書館探検」の様子

子ども達は初めて聞く言葉や初めてみる場所の様子など、探偵ファイルに多く書き込みをし、十分に図書館の情報収集をしていたようだった。

（2）お仕事体験

職員の説明を聞いた後、図書の装備、図書の並び替え、図書を棚に戻す、図書を返却する、の４つの仕事を体験した。いつもその業務を担当している職員が主に説明者となり、なぜその仕事が必要なのかということと合わせて、その手順を説明した。また日本の大半の図書館で採用されている日本十進分類法についても解説した。

学生スタッフと職員で作業の補助を行い、すべての子どもが４つの仕事をうまく行うことができた。

（3）謎解きラリー「新聞で探せ」

新聞縮刷版から過去の新聞記事を探し、問題の答えを見つけ出すミッションである。

ここからは、探偵団ごとに別々の問題を情報屋として学生が提示するようにした。どこに行けば過去の新聞が見られるのか、新聞縮刷版にたどり着いた後は、いつの縮刷版を見たらよいかなど、探偵団のメンバーと意見を出し合って協力しながら、一緒に答えを見つけていった。このころには子どもたちも慣れてきたのか、メンバー同士の会話や学生とのやりとりも弾んでいたようだった。

出された問題によってはかなり苦戦した探偵団もあったが、学生が情報屋として「情報を提供」したりして、どの探偵団も正解を見つけることができた。

（4）謎解きラリー「宝探し」

与えられたヒントや宝の地図、加えてここまでのミッションで得た情報を元に、図書館の中にある「宝」の資料を探した。

このミッションでも探偵団のメンバーとの協力は不可欠であった。どのように行動したらよいかみんなで作戦をたて、一緒に行動し、地図を読みながら書庫の中を歩いた。無事「宝」を発見できたときには、歓声が上がっていた。

これら４つのミッションが終了した後、認定式を行った。認定式では、いったん回収した探偵ファイルに、情報屋として一緒に活動した学生からメッセージを書いてもらい、集合写真と認定証を貼付して一人ひとりに渡した。同時にお土産として、しずっぴーグッズとあわせて、その子どもの誕生日に発行された新聞の一面コピーを入れて渡した。この新聞のコピーについては、付き添いの保護者と一緒に興味深く見入る姿があった。

プロジェクトの成果

イベントの最後に、子どもたちに感想を書いてもらった。

「本の場所が細かく決まっているのがすごいと思いました。」、「本のにおいがすごかった」、「（一番印象に残ったのは）倉庫の本にさわったこと」、「倉庫はくらくて本がいっぱいあった」など、様々な感覚で大学図書館を感じてくれたことが伝わってきた。

また「本を探すときに分類記号で見分けることが楽しかったです。」、「本に付いているラベルの意味を知ることが出来て良かった。」など今後の図書館利用に

つながると思われる感想を書いてくれた子どもも複数いた。

「知らないメンバー達と協力できて楽しかった」や「ミッションは少しむずかしかったけれど、グループみんなでとけてよかったです。」というように探偵団のメンバーと協力して一緒に活動できたことが良かったと書いてくれている子どもも多かった。「本」や「図書館」という共通の好きなものを介して、初めて会った子ども同士が交流し、意見を出し合って謎をとき、ともに達成感を得るということは、一日だけの体験ではあったが、子どもにとっては得るものが少なからずあったのではないか。

付き添いとしてご参加いただいた保護者の方にもアンケートに記入をお願いしており、多くのご意見をいただいた。

「最後の子供達の笑顔がとても輝いていたのが印象的でした」、「同行させていただいた案内ツアー、本当に楽しませていただきました」、「なぞときは親の私もやりたかったです（笑）」など、保護者の方もイベントを興味深く楽しんでくださり、子ども達の様子にも満足した、という声を多くいただいた。

今回発行したキッズ探偵カードは、一定期間ではあるが、図書館利用票を兼ねている（静岡本館のみ）。付き添いの保護者のうち、イベント当日に一般市民として利用者登録をされた方も多く、このイベントをきっかけに図書館を利用してくださっている方もおり、この点からも地域貢献の一助となったといえる。

学生スタッフには、「情報屋」として情報や問題を提示するだけではなく、担当する子ども達のまとめ役となってもらうよう伝えてあった。実際に職員よりも子ども一人ひとりと直接接することが多い重要な役割であったが、各ステージが順調に進むように気を配りつつ、楽しい雰囲気を作って子どもたちの意見をうまく引き出してくれた。このことが子どもたちの「探偵団のメンバーと楽しく協力できた」という感想にもつながったと思われ、期待以上に活躍をしてもらったと感じている。

最後に

保護者アンケートに「今後も継続的に同様のイベントを実施いただければと思います」や「本好きな子が集まっていたようだったので、もっと本の事（読んだ本とか）のディベート的な話す機会があればよいと思いました」といったイベントの継続や別の内容での実施を希望する感想も複数の方からいただいた。このことを今後の新たな課題としていきたい。

キッズチャレンジワーキンググループメンバー：松下昭重、小野華子、杉山智章、名波一明、中込崇、高橋里江、溜渕文子、真中進、鈴木雅子（以上、図書館情報課）

「新聞でさがせ」の様子

13

身近なもので Science

大橋 和義 ｜ 技術部教育支援部門技術専門職員

目的と背景

昨今、理科離れが社会的にも取り上げられている。そのような現状を憂慮してか、全国各地で体験型科学教育が盛んに行われている。さまざまな体験があると思うがその中でも実験は子供たちに驚きと感動を与えることが出来ると考える。そのような体験をすることにより、好奇心が生まれ、身近にある様々な現象に興味・関心を持ち、しいては理科好きに繋がると確信している。

しかしながら学校では実験器具等の不足など様々な理由で実験そのものが十分に行われていない現状もある。そこで、本事業では普段身近に接している物（洗濯糊、紙おむつ、花、ヨーグルトなど）を実験材料にしたり、学校では使わない実験器具を使用させることにより、科学を身近に感じたり、より興味・関心が高まることを期待してそれを目的とした。

本学技術部では、様々な専門分野の知識、技術を持った技術職員が、通常業務として実験・実習等の技術指導を行っており、このような業務の中で実験に関する豊富な知識や経験を身につけている。本事業のような体験型科学実験を開催することで、技術部が地域貢献できたと考える。

人工イクラ作成の様子

概要

小中高校が夏休み期間中に 4 回、小中高校生対象の実験を開催した。夏休みの自由研究にも対応できるように、「化学」「電気」「生物」の 3 分野での実験を行った。化学分野では、「人工イクラ＆スライム作り」電気分野では、「いろいろな電池を作ろう」「花の色水で色素増感型太陽電池」生物分野では、「乳酸菌の違いを DNA レベルで見てみよう」を実施した。参加者は各テーマ 10 名程度と少なかったが、参加してくれた小中高校生、特に保護者の方々に喜んでいただいた。

それぞれの実験の詳細は次の通りである。

実験の詳細

●第 1 回　身近なもので化学

～スライム＆人工イクラ作り～

日時：8 月 2 日（土）10 時～ 15 時

参加者：小学生 6 人、中学生 3 人、高校生 1 人

スタッフ：草薙弘樹（主担当）、上田瑞恵、大橋和義

実験内容：

“試薬と試薬を化学反応させる事で、別の物ができる”という事を学んでもらうことを目的とした。午前にスライム、午後に人工イクラ作りを行った。試薬は洗濯のりや湿気取り、薬局で買える薬など身近なものをできるだけ使用した。スライムや人工イクラの実験は周知されているが、今回はただ作るだけではなく、少し踏み込んでどのような化学反応が起こってスライムや人工イクラができているかを学んでもらった。それを踏まえて、できたスライムや人工イクラを別の試薬と反応させるとどうなるか、スライムや人工イクラを構成しているパーツを試薬で剥がすとどうなるか等の実験も行った。また、実験前の予想と実験後の検証、スタッフによる詳細説明という流れで行い、自分で何かしら考えてもらう機会も設けた。少し大変だったと思うが、化学の“化ける”という事を実感してもらえたと思う。

スライム作り

燃料電池の実験の様子

●第 2 回　身近なもので電気
～いろいろな電池を作ろう～

日時：8 月 8 日（金）10 時～ 15 時
参加者：小学生 17 人　中学生 2 人
スタッフ：上田瑞恵（主担当）、草薙弘樹、大橋和義
実験内容：

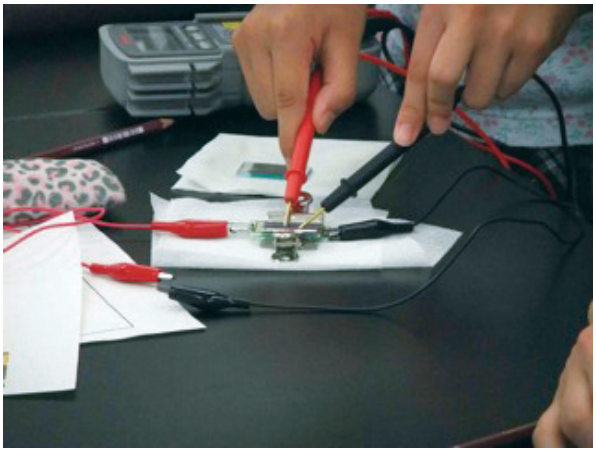
身近なもので電池を作って様々な電池を作成することで電池の違いを感じてもらうことを目的とし実験を行った。前半は電池の種類や乾電池のしくみなどを説明し、亜鉛板と銅板を用いた一次電池を作成した。後半では、燃料電池の作製を行った。まず、燃料電池のしくみについて説明を行った。次にスポーツドリンクを用いて作る燃料電池か紙オムツに含まれるポリマーを用いた燃料電池のどちらかを参加者に選んでもらいそれぞれ作成した。できた燃料電池は電池につなげ水の電気分解を観察してもらった。またオルゴール等につなげて電池として機能することを確認してもらった。電池のしくみなどは少し参加者には難しかった様子だったが、後半の燃料電池作成において参加者は興味を持って取り組んでいた。

●第 3 回　身近なもので電池
～花の色水から色素増感型太陽電池を作ろう～

日時：8 月 20 日（水）10 時～ 15 時
参加者：小学生 7 人　中学生 2 人
スタッフ：上田瑞恵（主担当）、草薙弘樹、大橋和義
実験内容

身近なものを取り入れることで色素増感型太陽電池が作れることを感じてもらうことを目的とし実験を行った。前半は色素増感型太陽電池と一般的なシリコン型太陽電池の違いについて説明を行った。実際にハイビスカスの色素溶液を用いた色素増感型太陽電池の作製を行った。後半はオリジナルの色素増感型太陽電池を作成した。色素溶液をコーラ、醤油、野菜ジュース等身近にあるものから参加者に 1 つ選んでもらった。選んでもらった色素溶液を用いて前半と同様の手順で色素増感型太陽電池を作成してもらった。作成した色素太陽電池を屋外でオルゴールにつなげて鳴らした。オリジナル色素増感型太陽電池作成では家庭にある身近なものを使って電極を調製したので太陽電池をより身近に感じてもらえた。

一次電池の実験の様子


色素増感型太陽電池の実験の様子

色素増感型太陽電池の実験の様子（屋外）

DNA 抽出の様子

●第 4 回　身近なもので生物

～乳酸菌の違いを DNA レベルで見てみよう～

日時：8 月 21 日（木）10 時～ 17 時

参加者：小学生 3 人、中学生 3 人、高校生 1 人

スタッフ：大橋和義（主担当）、草薙弘樹、上田瑞恵

実験内容

DNA というと普段の生活からかけ離れた物だというイメージがあるが、身近なものを試料として用いることで遺伝子を身近に感じてもらうことを目的とし実験を行った。身近な材料としてヨーグルトを用いて、実際に数種類のヨーグルトから DNA を抽出、PCR で DNA を増幅、制限酵素処理、電気泳動でバンドの確認という手順で実験をしてもらった。

学校での実験では使用しない実験器具を使用することで、少し高度な実験をしている感じを味わってもらうこともできたと思う。遺伝子というとやや専門的になるが、試料を身近なものを使用することで DNA や遺伝子というものをより身近に感じてもらえた。

実験を終えて

夏休み期間中の 8 月に 4 回の実験を実施した。

3 分野の実験を実施したが、少し欲張り過ぎたと感じた。対象者を小学生から高校生までとした為、幅広い年齢層に対応するのはかなりの労力であった。

予備実験、テキスト作成、実験準備、片付けなど、この規模の実験をするにはスタッフがもう少し必要だと感じた。実験の結果も必ずしも思っていた通りの結果にならなかったものもあったが、実験終了後のアンケートを見ると、「楽しかった」「またやってみたい」「実験が好きになりました」という好評な意見が大多数を占めたので、当初の目標はおおむね達成できたのではないかと思う。

参加者よりもむしろ保護者の方々から非常に好評で「来年もぜひやって欲しい」「昨年は知らなかった、知っていたら参加させた（残念ながら開催していません）」などの意見を頂いた。

夏休みの自由研究も兼ねて参加した参加者には、報告書のまとめ方なども併せて指導することができた。

指導する我々も普段は大学生を相手に指導しているが、小学低学年に説明するには、日常と違うコミュニケーションスキルも必要だと強く感じた。

今後は、今回の経験を生かし、来年度以降も積極的に地域貢献活動を行っていきたい。

発　行　日　　平成27年3月
発　　行　　国立大学法人静岡大学 イノベーション社会連携推進機構 地域連携生涯学習部門
編　　集　　髙村 知世 ｜ 静岡大学学術情報部研究協力課研究支援係
連　絡　先　　〒422-8529　静岡市駿河区大谷836　静岡大学イノベーション社会連携推進機構
☎054-238-4317　　E-mail　ochiiki@ipc.shizuoka.ac.jp
ウェブサイト　　http://www.lc.shizuoka.ac.jp/

※ 新聞記事は、静岡新聞社の許諾を得て転載しています。